

城山遺跡長勝院地点

発掘調査報告書

1987

埼玉県志木市教育委員会
志木市遺跡調査会
志木ロータリークラブ

はじめに

志木市教育委員会
教育長 金子 庄三

城山遺跡は、志木市の北西を流れる柳瀬川を臨む台地上にあり、縄文時代・古墳時代の集落跡であるとともに、中世においては『柏の城』が築城された遺跡として以前よりよく知られていました。この遺跡につきましては、過去、教育委員会・市史編さん室・市遺跡調査会によって城の本郭や三の郭と伝えられています部分の発掘調査を実施し、徐々にではありますがその実態が判明しつつあります。

さて、教育委員会では本遺跡、特に『柏の城』の性格を更に明らかにしたいと考えていましたが、今回、志木ロータリークラブの御援助を賜り、『柏の城』西の郭と伝えられる部分の発掘調査を実施し、大きな成果をあげることができました。また、調査には市内の小・中学生の参加があり、郷土の歴史を学んでいくという、児童・生徒にとって得がたい体験もできたようです。

ここに発掘調査報告書を刊行するにあたり、本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、郷土の歴史を研究するための資料として役立つことができれば幸いに思います。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまでには、埼玉県教育局指導部文化財保護課、志木市文化財保護委員会、志木市遺跡調査会の関係諸氏、金剛洋一会長を始めとする志木ロータリークラブ会員の皆様、長勝院代表役員新村信雄氏など、多くの方々の御指導と御協力がありました。ここに深く感謝申し上げます。

あ い さ つ

志木ロータリークラブ
会 長 金 剛 洋 一

ロータリークラブ創立15周年にあたり、地域社会奉仕の事業を検討中、広報誌『社会教育しき』第13号の記事に目が止まりました。これまで口承として伝えられていた「柏の城外堀」が発掘されたというビッグニュースであります。日頃、地域の子ども達が参加できる企画を組むことはできないものかと考えていた折でしたので、通常経験のできない発掘調査を是非、学習の場に取り入れられたらと思い、志木市教育委員会社会教育課に相談してみました。その結果、この事業をあらゆる面から検討され、夏休みを利用しての体験学習として、実現は可能との返事をいただきました。ここに当局に対し、心から感謝を申し上げる次第でございます。

ロータリークラブでは、社会奉仕委員会が担当し、計画に向けて取り組む一方、発掘場所について教育委員会と協議のうえ、「柏の城西の郭跡」と想定されている長勝院跡地が選ばれました。所有者であります福寿山地蔵院普光明寺住職新村信雄様の快諾も得られまして、ここに柏の城発掘調査団が組織され実施されました。

真夏の強い日差しの下で、汗を流しながら体験する小・中学生が遺物を発見するたびにあげる感動の声が、今も耳に残っております。

発見された資料は、今後、専門家の研究材料として活用されますが、体験を通じて肌で感じ得た郷土の歴史への理解は、生涯忘れられない思い出の一つになろうと思います。更には、文化財の大切さなど、子ども達への啓蒙運動の一助になったことを確信いたしております。

最後に、この事業の推進にあたりまして、深いご理解とご協力、ご指導くださいました、志木市教育委員会・志木市遺跡調査会の関係各位の皆様には深く感謝申し上げます。

今後、私達一人ひとりが文化財に対する認識を更に深め、自然と文化財を守る環境作りにお手伝いできれば幸に存じております。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市柏町三丁目に所在する城山遺跡（県No09-3）長勝院地点（志木市柏町三丁目10番7号）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会が主体となり、志木市遺跡調査会・志木ロータリークラブが加わり、昭和61年7月16日から同年9月27日まで実施した（61委保記第2-3498号）。
3. 本書の編集・作成は、志木市教育委員会が行い、執筆は佐々木保俊があたった。
4. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。
 - 縮尺は、各挿図版中に指示した。
 - 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
 - 遺構挿図版中の遺物番号は、遺物挿図版中のそれと一致する。
 - 遺構の略記号は、以下のとおりである。
H=住居址、D=土坑、M=溝址
5. 発掘調査及び出土品整理、報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏に御教示・御援助を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略）
埼玉県教育局指導部文化財保護課・志木市史編さん室・志木市立志木第三小学校・会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・梅沢太久夫・小出輝雄・肥沼正和・斉藤 稔・笹森健一・斯波 治・高橋 敦・中島岐視生・並木 隆・新村信雄・松本富雄
6. 調査組織

志木市教育委員会

教 育 長 金子庄三
事 務 局 次 長 斉藤昭吉
学 校 教 育 課 長 横山 彰
社 会 教 育 課 長 白砂正明
社 会 教 育 課 長 補 佐 清水孝平
社 会 教 育 課 下河辺信行・佐々木保俊・岩崎香代子

志木市遺跡調査会

理 事 神山健吉（志木市文化財保護委員長）
井上国夫（志木市文化財保護副委員長）
根岸正文（志木市文化財保護委員）
宮野和明（ ）
尾崎征男（ ）
監 事 田中義二（志木市教育委員会社会教育指導員）
服部一次（志木市立郷土資料館長）
調査員 尾形則敏

志木ロータリークラブ

会 長 金剛洋一

副会長 浅田光二

幹 事 綱島政雄

15周年記念事業実行委員長 神山秀三郎

社会奉仕委員会

委 員 長 尾崎征男

副委員長 高野英男

委 員 粟村 競

塩谷健次郎

塚元 健

発掘調査及び整理作業参加者

木村恵美子・菊地美智子・岸福次郎・小庄まゆみ・小俣暁子・金野照子・高橋平作・深井恵子・
村井京子・山崎鎌一

大林邦生・塚木 淳・吉田和弘（志木市立志木小学校）

井田征之・滝本文秀（志木市立志木第二小学校）

新井克昌・伊野部信弘・市田憲治・加藤忠明・菊池健一・小坂卓士・戸室治彦（志木市立志木
第三小学校）

江村佐知子・江村美香子・笠原美奈子・町田理佐子・山田裕子（志木市立志木第四小学校）

大井昭子・古田充代子・宮田隆志（志木市立宗岡第二小学校）

大川秀子・金子直哉（志木市立宗岡第三小学校）

沢中知子・鹿倉由己・田澤人志・千田由香・深沢聡一・細田哲雄（志木市立宗岡第四小学校）

石井志夫・菊地吉隆・小山 勲・忽滑谷浩行・三田幸成・渡辺大悟（志木市立志木中学校）

小川慶太郎・太田直樹・小嵐賢治・後藤孝広・松崎 勝（志木市立志木第二中学校）

加納直幸（川越市立高階中学校）

目 次

はじめに

あいさつ

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

I. 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の立地	1
3. 発掘調査の経過	2
II. 検出された遺構と遺物	3
1. 住居址	3
2. 土坑	11
3. 溝址	15
4. 包含層出土の遺物	15
III. まとめ	19
調査に参加して	22

図 版 目 次

図版 1	発掘
図版 2	遺構
図版 3	遺構
図版 4	遺構
図版 5	遺物
図版 6	遺物
図版 7	遺物
図版 8	遺物

挿 図 目 次

第 1 図	発掘地点と周辺の地形 (1/5000)	1
第 2 図	遺構分布図 (1/200)	2
第 3 図	61号住居址 (1/60)	4
第 4 図	61号住居址出土遺物 (1/4)	5
第 5 図	62号住居址 (1/60)	6

第6図	62号住居址出土遺物 (1/4)	6
第7図	63・64号住居址、7号溝址 (1/60)	7
第8図	63号住居址出土遺物 (1/4)	8
第9図	64号住居址出土遺物 1 (1/4)	9
第10図	64号住居址出土遺物 2 (1/4)	10
第11図	33～35・47・48号土坑、6号溝址 (1/60)	11
第12図	36～38・40～45号土坑 (1/60)	12
第13図	46号土坑 (1/60)	14
第14図	包含層出土の遺物 1 (1/3)	16
第15図	包含層出土の遺物 2 (1/3)	17

I. 調査の経緯

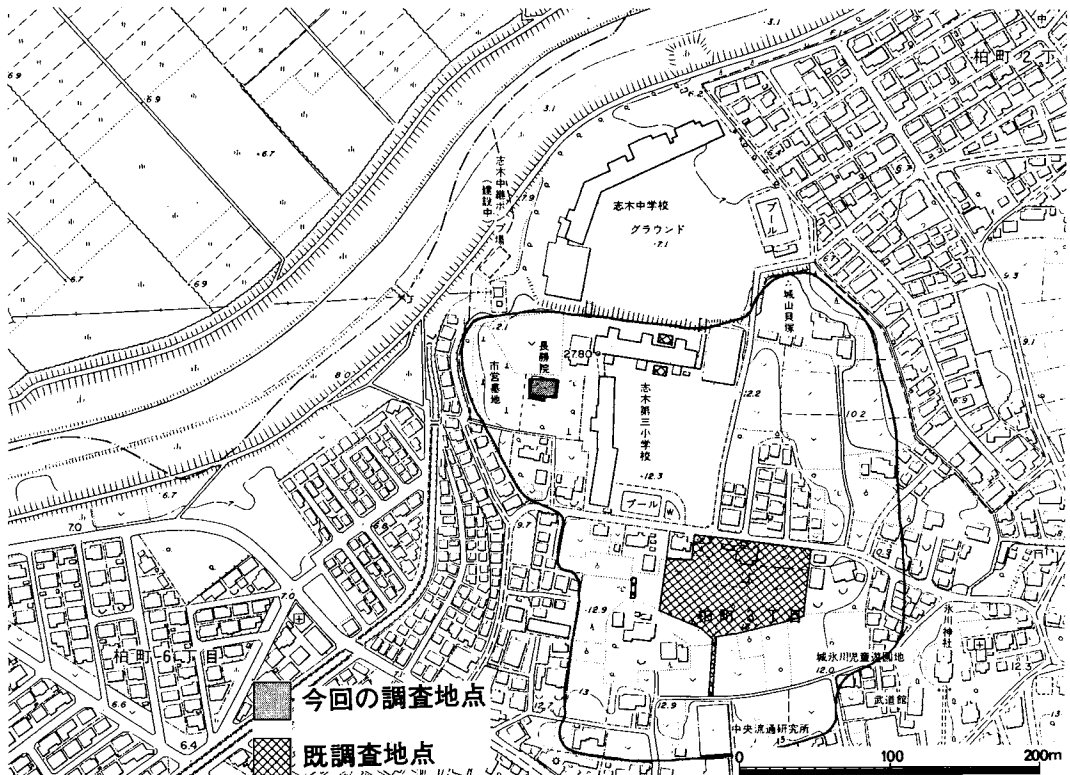
1. 調査に至る経過

昭和61年4月、志木ロータリークラブよりボランティア事業の一環として、埋蔵文化財の調査に対し協力したい旨の照会が教育委員会にあった。教育委員会では社会教育課が担当課となり協議を行ったが、かねてから問題とされていた市内で唯一の城跡である城山遺跡内の『柏の城』跡の実態を明らかにしていくため発掘調査を行うことで意見が一致した。『柏の城』跡に関しては、かつて教育委員会・市史編さん室・市遺跡調査会によって、本郭・三の郭と伝えられている部分の発掘調査が実施されていたため、他の郭の調査が必要と考えられ候補地を選定したが、西の郭と伝えられている部分にある清流山薬王寺長勝院の跡地が調査可能となりこれに決定した。

教育委員会では、6月30日文化庁長官宛、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を行い、7月16日から調査を開始した。

2. 遺跡の立地

志木市は、埼玉県南部に位置する。市域の地理的環境は、洪積台地たる武蔵野台地と荒川（旧入間川）の形成した沖積地とに大きく二分され、埋蔵文化財包蔵地の大部分は洪積台地上に存在す



第1図 発掘地点と周辺の地形 (1/5000)

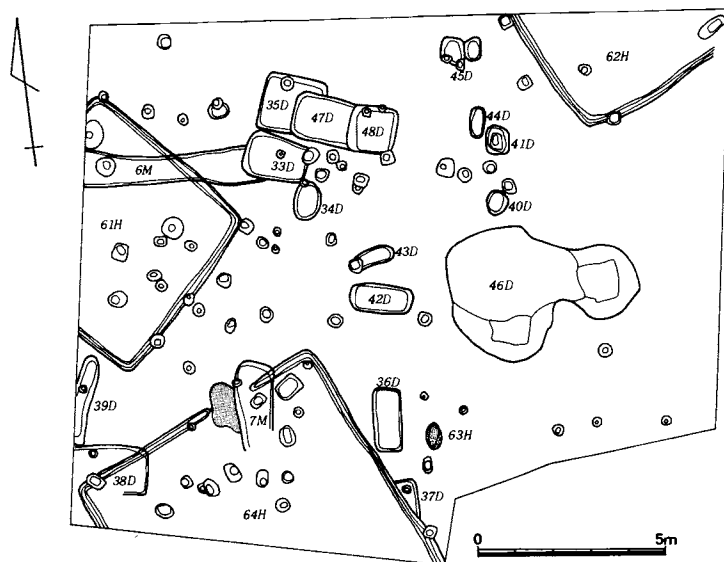
る。この台地は武蔵野台地野火止支台に属し、北東方向に舌状に伸びる台地の先端部にあたる。

城山遺跡は、北西に北東流する柳瀬川を臨む台地上にある。遺跡の北東には、柳瀬川に直交するように浅い谷が入り込んでおり、遺跡のある部分は小規模な舌状台地となっている。遺跡を乗せる台地上の標高は約12m、低地との比高差約5 mを測る。

3. 発掘調査の経過

発掘調査は7月16日より開始した。調査区の表土は、砂利やコンクリート塊などが埋められており堅く固められていたため、表土剥ぎに関してはバックホーを使用して行った。その後、遺構確認を開始したが、住居址の他土坑・溝址など、予想以上に遺構が密集していることが判明してきた。7月18日からは61号住居址の調査を始めたが、これを切る溝址を発見、6号溝址としてこの調査も行った。7月23日は雨のため1日延びた発掘体験学習の開始日で、参加した小・中学生への注意などの終了後、発掘を指導する協力員のもと61～64号住居址にそれぞれ入り、一斉に作業を始めた。7月26日には体験学習も終わったが、暑さと疲労に耐えながら頑張った小・中学生も満足そうであった。7月28日からは各住居址の仕上げを行ったが、63号住居址は弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけてのものであり、他の住居址は古墳時代後期のものであることが判明した。住居址調査と平行して土坑の調査も行ったが、覆土の状態や僅かながらであったが陶器片の出土がみられ、これらの土坑が中世以後のものであることも分かってきた。調査されたそれぞれの遺構は状況に応じ、写真撮影・実測などの記録化を行っていき8月11日には大規模な地下式墳である46号土坑を残してすべての調査を終了した。

8月18日から22日までは発掘調査を一時中断し、小・中学生の第2次体験学習である整理作業を行う。自分達の発掘した遺物を水洗から復元作業まで実施したが、特に復元作業では土器片が接合



第2図 遺構分布図 (1/200)

するたびに歓声が上がっていた。

8月25日からは最後に残った46号土坑の調査を再開、規模の大きさ特にその深さに作業は難行し、予想以上に時間がかかるが、9月22日には写真撮影・実測を完了した。9月27日には埋め戻しを行いすべての作業を終えた。

Ⅱ．検出された遺構と遺物

1．住居址

61号住居址（第3図）

西半が調査区外にある。平面形は正方形を呈するものと思われ、一辺5.3mを測る。壁は急斜に立ち上がり、40cm前後を測る。壁溝は調査した部分では全周し、幅5～8cm、深さ6～18cmを測る。床面は壁際を除いてよく踏み固められていた。また、住居中央から北に寄った部分の床面が35×30cmの範囲で焼けていた。カマドは調査区外にあるものと思われる。主柱穴はコーナー部の深度のある3本が相当しよう。他のピットは後世のものである。貯蔵穴は北コーナー部にあるピットが該当しようか。覆土中には焼土粒子・炭化物粒子を多く含み、焼失家屋の可能性もある。また、覆土の堆積状態が不規則で、埋め戻された感がある。遺物は土器のみで、覆土中・床面上から多く出土したが、破片が大部分であった。本住居址の時期は出土した土器から鬼高式期と考えられる。

61号住居址出土遺物（第4図）

土師器环形土器（1～3）

1は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に僅かな稜をもつ。口唇部は肥厚し、口縁部は外反する。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削りの後ヘラナデされる。体部内面はナデられる。貯蔵穴内からの出土で、1/2の遺存度。

2は丸底の底部から僅かに稜をもって体部に移行する。体部は内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は外反する。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り後ヘラナデされる。体部内面はていねいにヘラナデされる。南東壁下、床面上の出土で、口縁部の一部を欠損する。

3は小形の土器で、丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は外反する。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り後ヘラナデ、体部内面はていねいにナデられる。内面及び口縁部外面は赤彩される。床面上出土で、1/4の遺存度。

土師器鉢形土器（4）

体部は僅かに内湾し、口縁部は外反する。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り後ナデられる。体部内面はナデられる。覆土中の出土で、1/4の遺存度。

土師器台付鉢形土器（5）

雑な作りの土器で、高环形土器の可能性もある。脚台部上半は「ハ」字状に開き、下半は外湾する。鉢部外面はヘラ削り後ナデ、内面はナデられる。脚台部上半外面はヘラ削り後ナデ、内面はナデられる。裾部内外面は横ナデされる。住居ほぼ中央の床面上の出土で、鉢部の大部分を欠く。

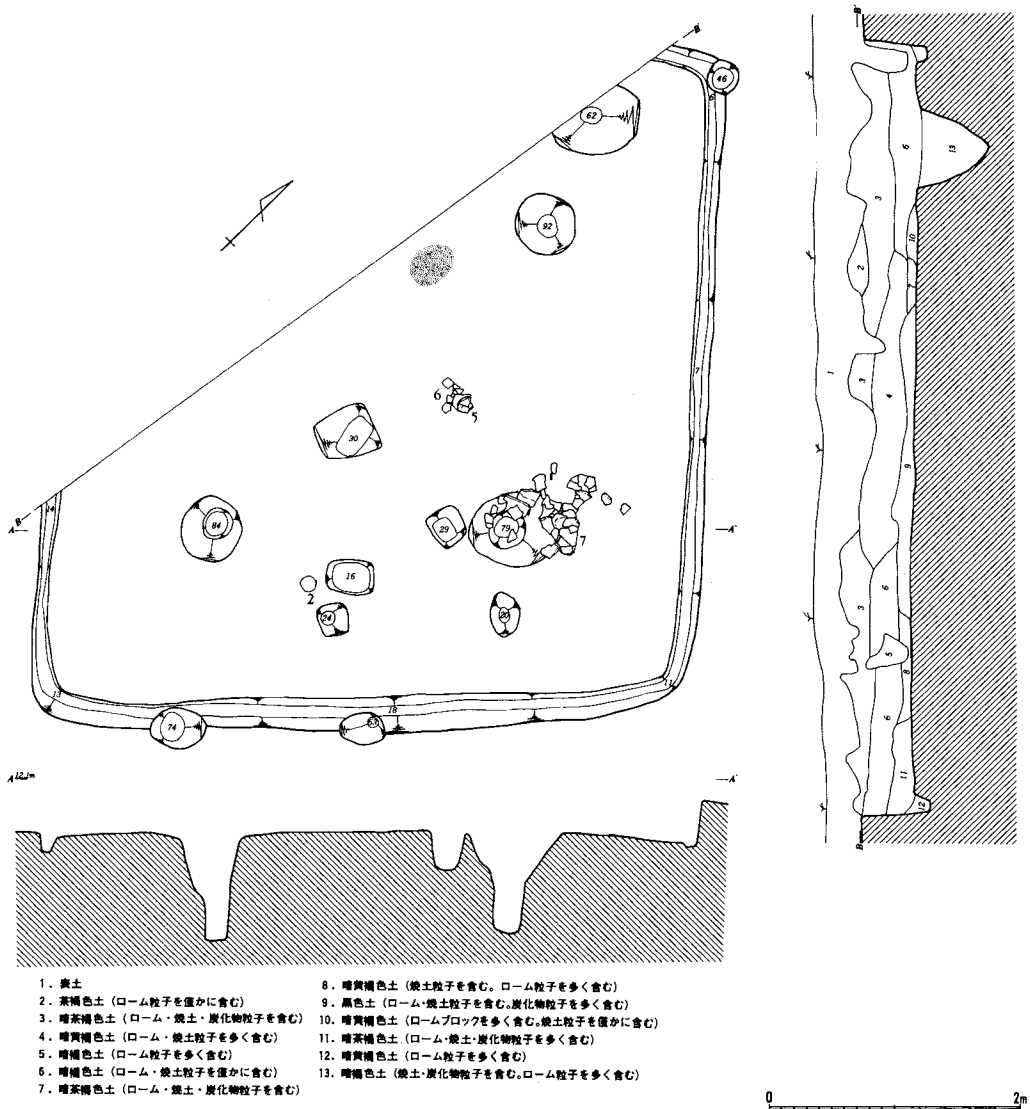
土師器甕形土器 (6)

胴部は僅かに張り、頸部に僅かな稜をもち、口縁部は大きく外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下はナデられる。住居ほぼ中央の床面上の出土で、1/3の遺存度。

土師器甕形土器 (7・8)

7は胴部が僅かに内湾しながら開き、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラ削り後ヘラナデされる。胴部内面はヘラナデされる。東コーナー部の床面上の出土で、ほぼ完形。

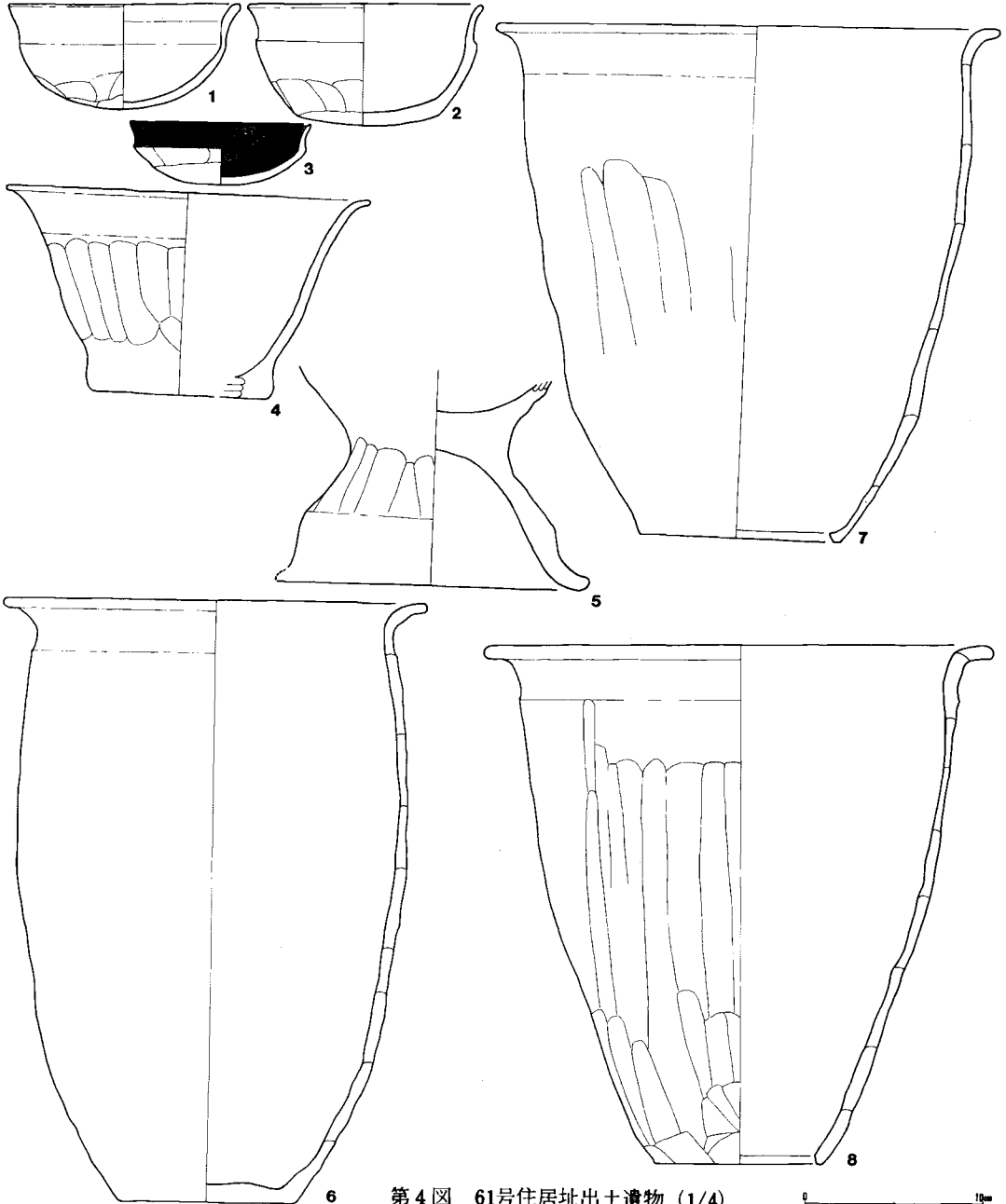
8は胴部が僅かに内湾しながら開き、頸部に稜をもち、口縁部は大きく外反する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラ削り後ていねいにヘラナデされ光沢をおびる。胴部内面はヘラナデされ、その跡が擦痕状を呈する。覆土中の出土で、口縁部から胴部上位にかけて1/2程欠損する。



第3図 61号住居址 (1/60)

62号住居址（第5図）

住居北側 1/2 以上が調査区外にあり、平面形・規模は不明である。壁は急斜に立ち上がり、35cm 前後を測る。壁溝は調査した部分では全周し、幅15cm前後、深さ5～11cmを測る。床面は壁際を除いてよく踏み固められていた。カマドは調査区外にあるものと思われる。ピットは1本検出された。貯蔵穴は東コーナー部にあり、85×45cmの大略長方形を呈し、深さ73cmを測る。覆土は黒褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。遺物は土器のみで、覆土中・床面上から僅かに出土した。本住居址の時期は出土した土器から鬼高式期と考えられる。



第4図 61号住居址出土遺物 (1/4)

62号住居址出土遺物 (第6図)

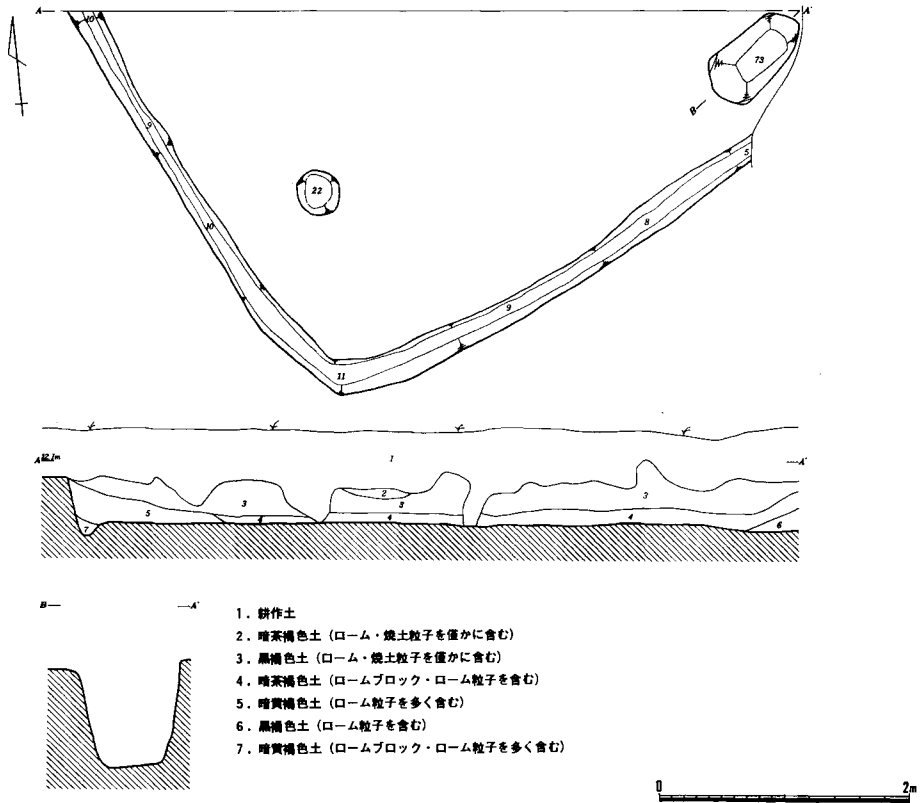
土師器甕形土器 (1・2)

1は胴部上位が張り、口縁部は僅かに外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はヘラナデされるが、外面は光沢をおびる。貯蔵穴内の出土で、胴部下位以上1/2の遺存度。

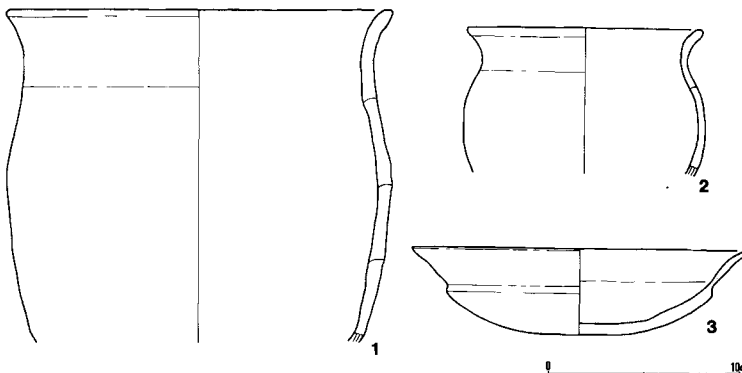
2は小形の土器で、球状の胴部から口縁部は外湾する。口頸部内外面は、横ナデ、それ以下はナデられる。覆土中の出土で、胴部中位以上1/5の遺存度。

土師器坏形土器 (3)

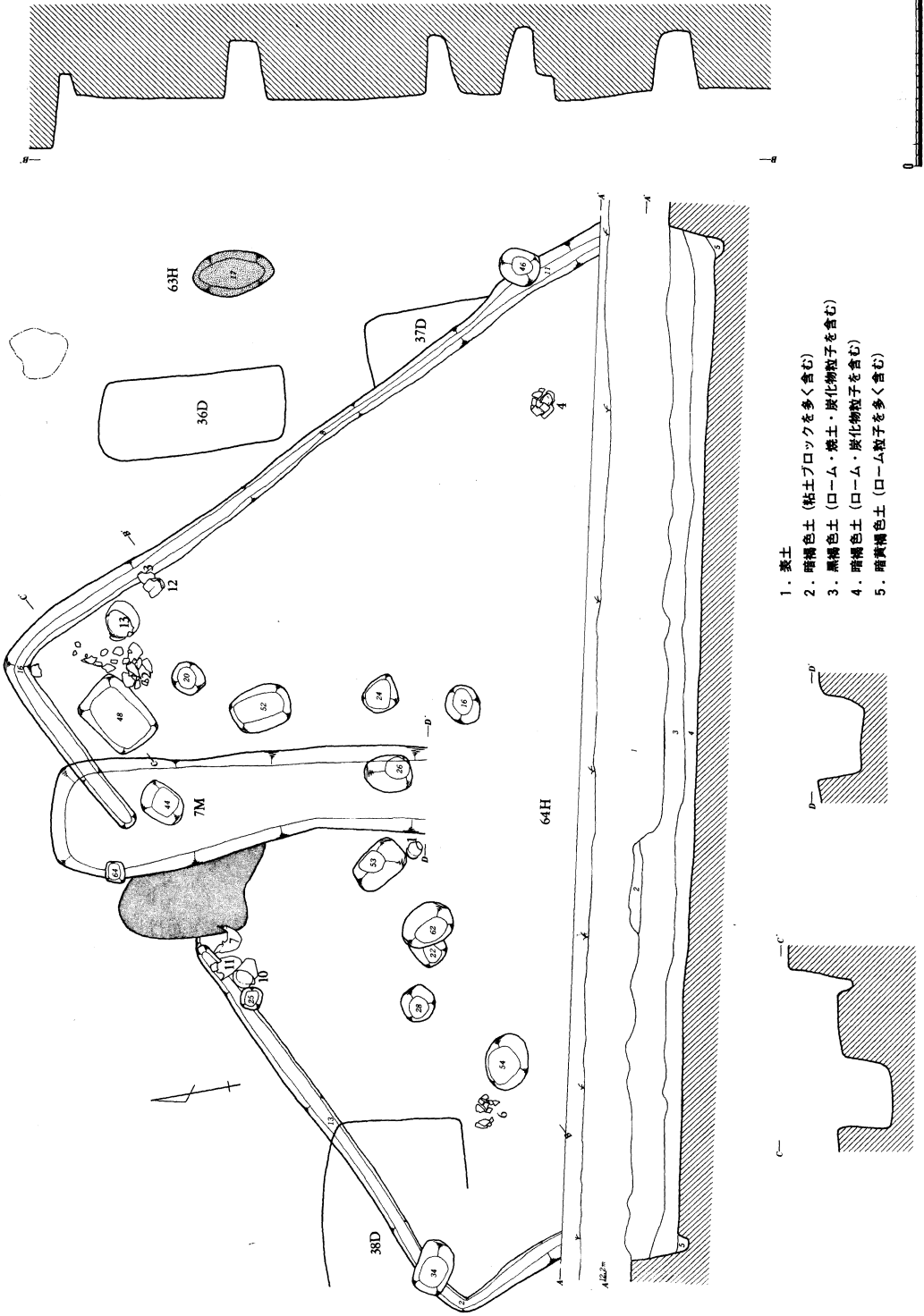
丸底の底部から内湾しながらゆるやかに開き、頸部に明瞭な稜をもち、口縁部は直線的に開く。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はていねいにヘラナデされる。体部内面はナデられる。貯蔵穴内



第5図 62号住居址 (1/60)



第6図 62号住居址出土遺物 (1/4)

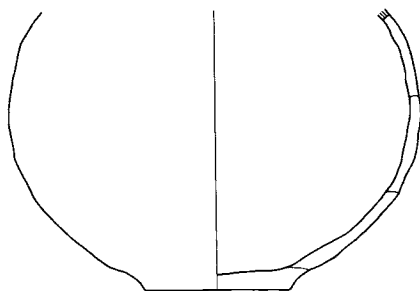


第7図 63・64号住居址、7号溝址 (1/60)

からの出土で、口縁部の大部分を欠損する。

63号住居址（第7図）

床面の硬化部分（一点鎖線の範囲内）と炉址のみが確認された。炉址は75×40cmの楕円形を呈し、深さ7cmの掘り込みをもつ。遺物の出土は僅かであった。本住居址は出土した土器から弥生時代末葉ないし古墳時代初頭の時期が与えられよう。



第8図 63号住居址出土遺物（1/4）

63号住居址出土遺物（第8図）

壺形土器である。胴部は最大径を中位にもち球状を呈する。外面はていねいに磨かれるが、部分的にハケ目を残す。内面はヘラナデされる。

64号住居址（第7図）

住居南半は調査区外にあり、37・38号土坑、7号溝址に切られる。平面形は正方形を呈するものと思われ、一辺7.3mを測る。壁は急斜に立ち上がり、高さ40cm前後を測る。壁溝は調査した範囲ではカマド部分を除いて全周し、幅10～15cm、深さ2～16cmを測る。床面は壁際を除きよく踏み固められている。カマドは北壁、東に寄った部分にあるが、右袖は7号溝址に破壊されている。ロームを馬の背状に隆起させ残し、灰白色粘土を被覆させ袖部とする。天井部も灰白色粘土で構築される。ピットは床面上に11本検出されたが、コーナー部の深度のある2本が支柱穴の一部であろう。他のピットは後世のものである。貯蔵穴は北東コーナー部にあり、65×50cmの長方形を呈し、深さ48cmを測る。覆土には焼土粒子・炭化物粒子を多く含み、焼失家屋の可能性がある。遺物の大部分は土器で、覆土中・床面上から多く出土したが、カマド左側の壁下、貯蔵穴付近に集中する。また住居中央床面上から3点の炭化種子（ヤマモモ）が出土している。

64号住居址出土遺物（第9・10図）

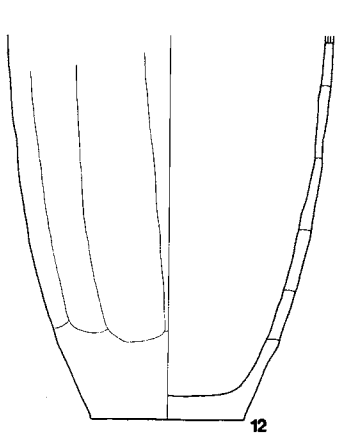
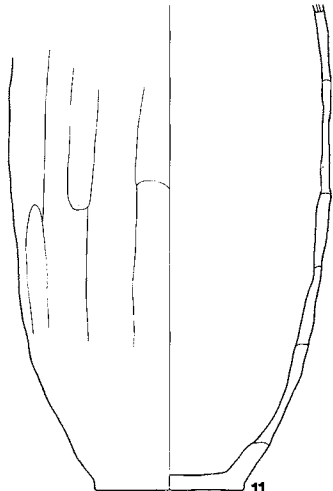
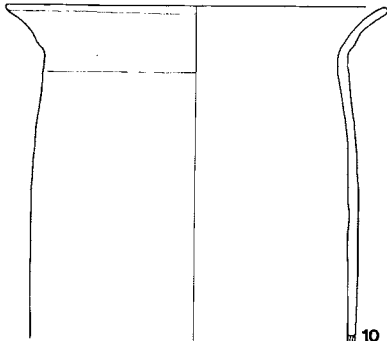
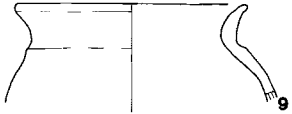
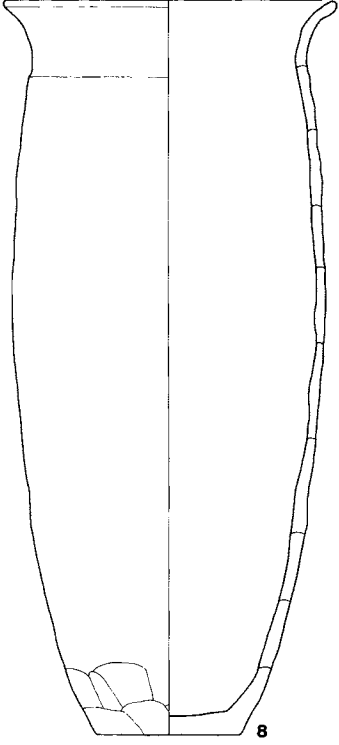
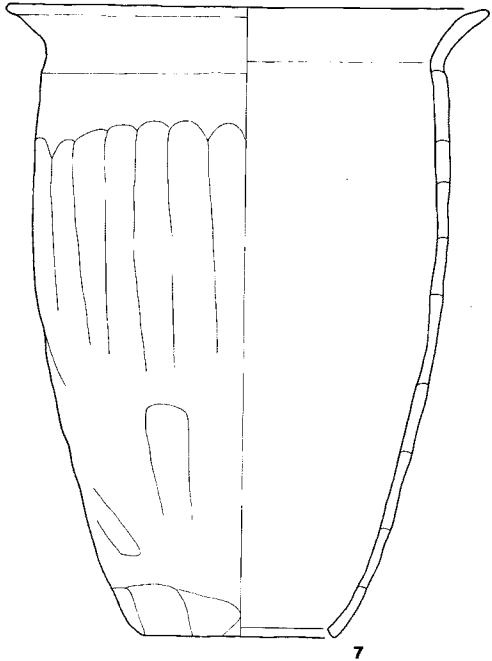
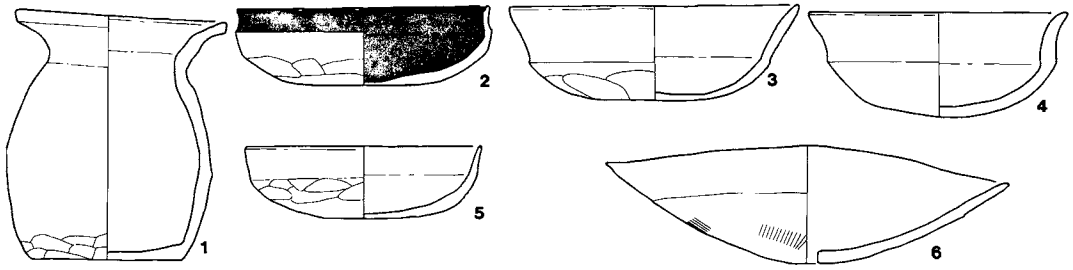
土師器壺形土器（1）

底部が広いため、胴部は寸胴状を呈する。口縁部は大きく外反し、口唇部内面は図面上にはよく表われないが、僅かに蓋受け状にくぼんでいる。口縁部内外面は横ナデ、以下ヘラナデされるが、外面胴部下端にはヘラ削り痕を残す。カマド前面の床面上の出土で、完形品。

土師器坏形土器（2～5）

2は丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は僅かに外湾する。内面口唇下には1条の沈線が巡る。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り後ヘラナデされる。内面はナデられる。外面口縁部及び内面は赤彩される。北東コーナー部の床面上出土で、口縁部を欠損する。

3は体部に比して口頸部が高い土器。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は直線的に開く。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ削り後ヘラナデされる。内面はナデられる。内面には油脂状の炭化物が付着する。北東コーナー部の床面上の出土で、2/3の遺存度。



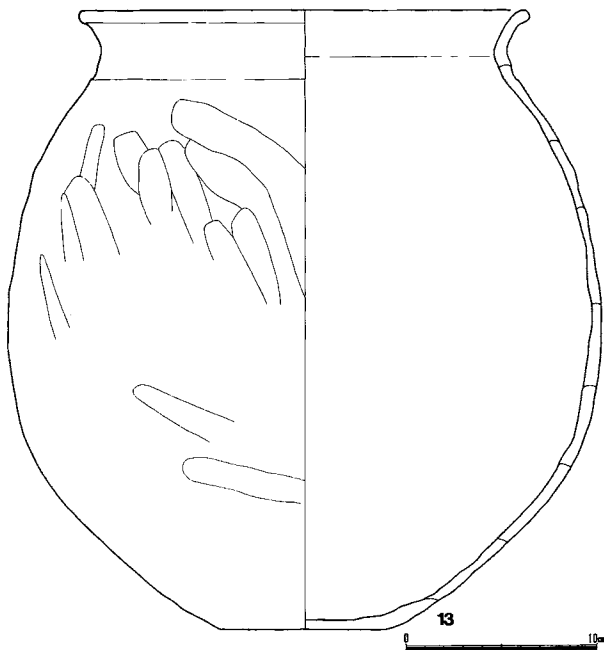
第9図 64号住居址出土遺物1 (1/4)

4は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、口縁部は外湾する。口縁部内外面は横ナデ、以下ナデられる。南東コーナー部に近いと思われる部分の床面上の出土で、2/3の遺存度。

5は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に立つ。口縁部内外面は横ナデ、以下ナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。床面上の出土で、口縁部の一部を欠く。

土師器甑形土器（6・7）

6は皿状を呈する土器で、底部には1孔を有するため、甑形土器として取り扱った。口縁部内外面は横ナデ、以下はナデられるが、外面にはハケ目を残す。北西コーナー部の床面上の出土で、完形。



第10図 64号住居址出土遺物2（1/4）

7は僅かに内湾する長胴の胴部から稜をもつ頸部に至り、口縁部は大きく外湾する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下はナデられるが、外面にはヘラ削り痕を残す。カマド左側の床面上の出土で、口縁部から胴部上位にかけての1/3を欠損する。

土師器甕形土器（8～13）

8は胴部最大径をほぼ中位にもつ土器で、頸部に稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はていねいにヘラナデされ、特に下半は光沢をおびる。下端にはヘラ削り痕を残す。内面はナデられる。カマド掛け口に残されていた土器で、1/2の遺存度。

9は小形の土器。胴部は丸胴を呈するものと思われ、頸部に稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデ、以下はナデられる。覆土中の出土で、胴部上位以下を欠く。

10は胴部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は大きく開く。口頸部内外面は横ナデ、以下はナデられる。カマド左横、床面上の出土で、胴部下半を欠損する。

11は胴部最大径を中位にもつ。外面はヘラ削り後ナデ、内面はナデられる。外面には部分的に煤が付着する。カマド左横、床面上の出土で、胴部上位以上を欠く。

12は底部から徐々に開く。外面はヘラ削り後ヘラナデされ光沢を有する。内面はヘラナデされる。底面には木葉痕を残す。北東コーナー部に近い東壁下、床面上の出土で、胴部中位以上を欠く。

13は胴部中位に最大径をもち、ほぼ球状を呈する胴部をもつ。頸部に僅かな稜をもち、口縁部は外湾する。口頸部内外面は横ナデされる。胴部外面はヘラ削り後ていねいにヘラナデされ光沢をおびる。部分的に煤が付着する。内面はナデられる。北東コーナー部の床面上出土で、口縁部3/4を欠損する。

2. 土 坑

33号土坑 (第11図)

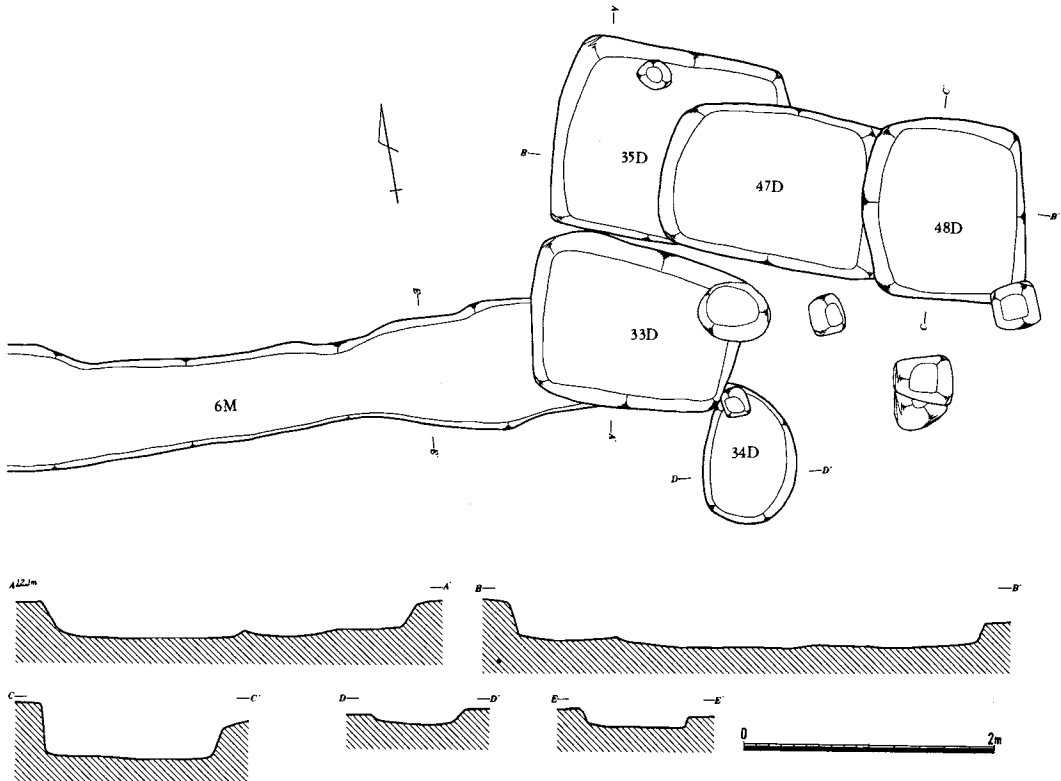
35号土坑・6号溝址を切る。1.7×1.3mの大略長方形を呈し、深さ30cmを測る。坑底は平坦で、壁の立ち上がりは急である。北東コーナー部のピットは後世のものである。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土の単一層である。遺物は縄文土器・土師器片の出土があるが、流れ込んだものと思われる。また、馬の歯1点の出土があった。

34号土坑 (第11図)

1.1×0.75mの不整楕円形を呈し、深さ10cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。土坑北側のピットは後世のものである。覆土はローム粒子を僅かに含む暗褐色土であった。遺物は縄文土器・土師器の小片が僅かに出土した。

35号土坑 (第11図)

33号土坑に切られ、47号土坑を切る。1.8×1.55mの長方形を呈し、深さ30cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。北壁下のピットは後世のものである。覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土の単一層である。遺物は土師器の小片が僅かに出土した。



第11図 33～35・47・48号土坑、6号溝址 (1/60)

36号土坑（第12図）

63号住居址を切る。1.7×0.7mの長方形を呈し、深さ50cm前後を測る。坑底は平坦で、壁の立ち上がりは急である。覆土はローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土の単一層であった。遺物の出土はなかった。

37号土坑（第12図）

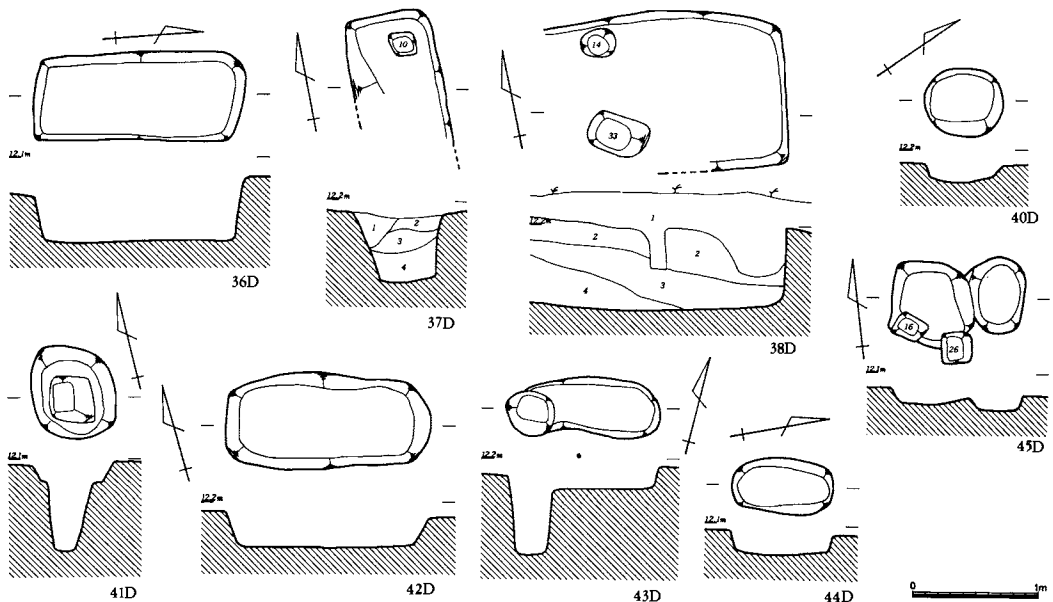
63・64号住居址を切る。短辺0.75mの長方形を呈するものと思われる。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。北壁下にピットが1本検出された。覆土は1層—ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土、2層—ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土、3・4層—ローム粒子を僅かに含む暗褐色土で、4層がやや暗い。遺物は縄文土器・土師器の小片が僅かに出土した。

38号土坑（第12図）

64号住居址を切り、西半は発掘区外にある。短辺1.25mの長方形を呈するものと思われ、深さ60cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底に2本のピットが検出された。覆土は1層—表土、2層—ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土、3層—ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗褐色土、4層—ローム粒子を含む黒褐色土。遺物は土師器片が大部分であるが、鉄釉の施された陶器小片1点があった。

40号土坑（第12図）

65×55cmの楕円形を呈し、深さ15cm前後を測る。断面は皿状を呈する。覆土は焼土粒子・炭化物粒子・灰を含む黒褐色土で、骨片らしきものがみられた。遺物は灰釉が施された陶器小片1点がある。



第12図 36～38・40～45号土坑（1/60）

った。

41号土坑（第12図）

一辺70cm前後の不整形を呈し、深さ75cmを測る。柱穴状のピットであるが、覆土中に焼土粒子・炭化物粒子・灰を含むという、40・42・45号土坑と共通点をもつため、一応土坑として取り扱った。遺物の出土はなかった。

42号土坑（第12図）

1.55×0.8mの長方形を呈し、深さ25cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。覆土はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土の単一層である。遺物は土師器・須恵器片が僅かに出土したが、瓦質の甕形土器の小片1点がある。

43号土坑（第12図）

1.2×0.4mの長楕円形を呈し、西側にはピットがある。坑底は平坦で、深さ20cm前後を測り、壁は急斜に立ち上がる。覆土はローム粒子を含む暗褐色土であった。遺物は縄文土器・土師器の小片が僅かに出土した。

44号土坑（第12図）

0.8×0.45mの長方形を呈し、深さ15cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む暗褐色土であった。遺物の出土はない。

45号土坑（第12図）

2基の不整形の土坑の重複を思わせるが、覆土は灰を主体とし、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む同一のものであった。付随する2本のピット中の覆土も同様であった。遺物の出土はなかった。

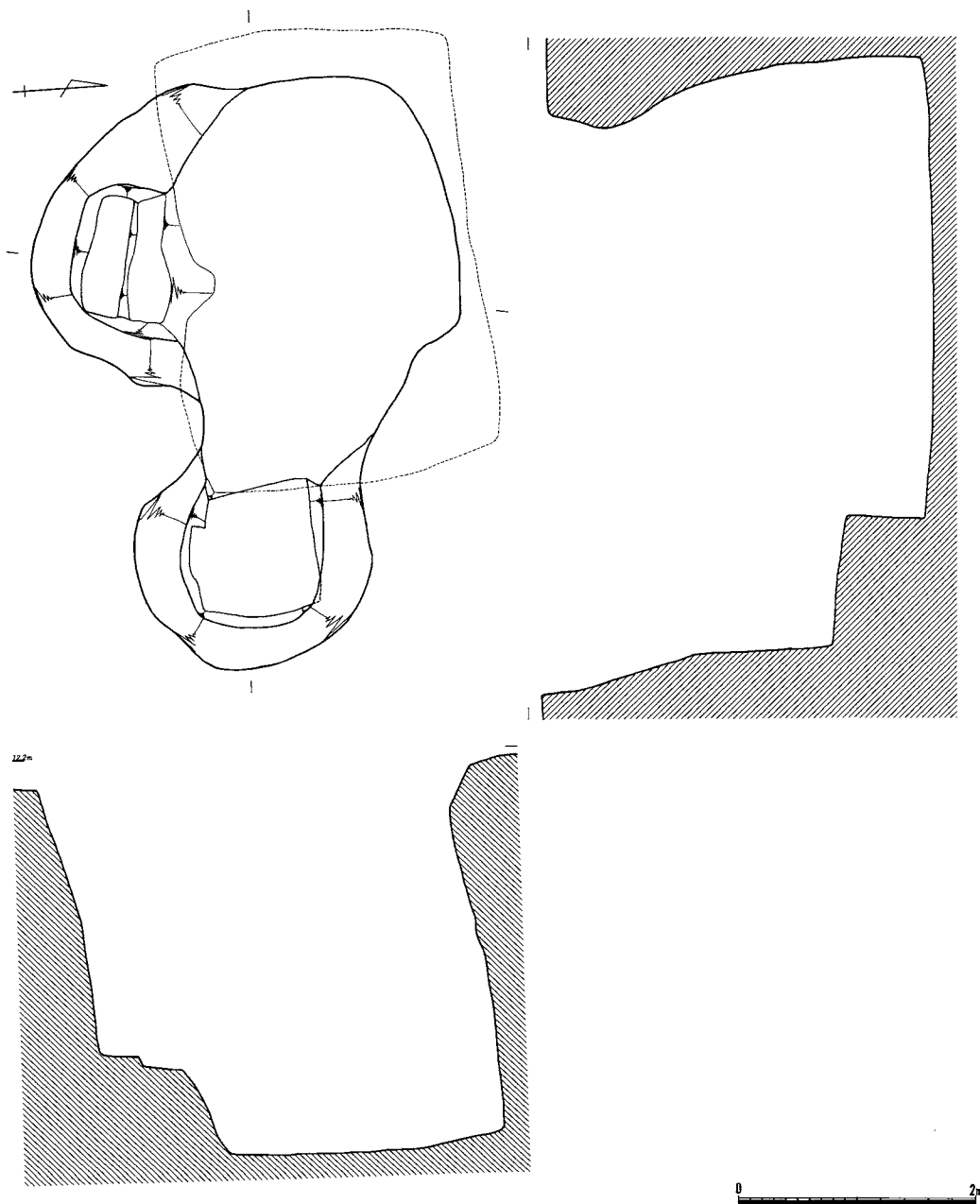
46号土坑（第13図）

南・東の2ヵ所に竪坑をもつ地下式壙であるが、地下室の天井部は崩壊していた。竪坑は両者とも開口部は楕円形を呈し、漏斗状に掘り込まれ底面に至る。南側竪坑部の底面は1.0×0.7mの長方形を呈し段をもつ。東側のものは一辺1.0m前後の正方形を呈する。地下室は3.9×2.4mの長方形を呈し、竪坑部底面より70cm前後低い。覆土はロームブロック・ローム粒子を多量に含む暗黄褐色土と、黒褐色土・暗褐色土の互層となる。遺物は縄文土器・土師器片が大部分であるが土師質土器片2点、暗茶褐色釉の施された播鉢片1点の出土がある。

47・48号土坑（第11図）

当初、住居址と想定し調査したが、2基の土坑の重複と判明した。前後関係は不明である。47号

土坑は一辺1.25mの長方形を呈し、深さ35cm前後を測る。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。
 48号土坑は1.45×1.3mの大略長方形を呈し、深さ40cm前後を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は両者ともローム粒子を含む黒褐色土であった。遺物の大部分は土師器片であるが、土師質土器の小片1点の出土がある。



第13図 46号土坑 (1/60)

3. 溝 址

6号溝址（第11図）

61号住居址を切り、33号土坑に切られる。ほぼ東—西の走行方向をとり、幅0.7×1.0m、深さ10cm前後を測る。溝底は平坦で、壁の立ち上がりは急斜である。覆土はローム粒子を僅かに含む暗褐色土であった。遺物は土師器の小片が僅かにあった。

7号溝址（第7図）

64号住居址を切る。ほぼ北—南の走行方向をとるが、南側では壁の確認ができなかった。土坑の可能性もある。幅0.75～1.1m、深さ40cm前後を測り、溝底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。覆土はローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土の単一層であった。遺物は土師器片が大部分であるが、完形の硯1点の出土があった。

4. 包含層出土の遺物

第1類（第14図） 縄文時代早期後半の土器である。

1は微隆起線により文様が描出される土器。野島式土器である。

2～4は太沈線で区画し、区画内には結節沈線文が充填される。2・3は口唇上に刻みが加えられる。いずれも内面には条痕文が施される。鶴が島台式土器である。

5は縦位に2列の刺突文が施され、口唇上には刻みが加えられる。茅山上層式土器であろうか。

6～8は隆帯が貼付された土器。6・7は口縁部に隆帯を巡らせた土器で、隆帯上には二又状の施文具による刺突が加えられる。器面には幅広の沈線文が波状に施される。8は縦・横に隆帯を貼付した土器で、隆帯上は二又状の施文具の刺突により加飾される。器面は幅広の沈線が波状に施される。以上の土器は同一個体と思われる。

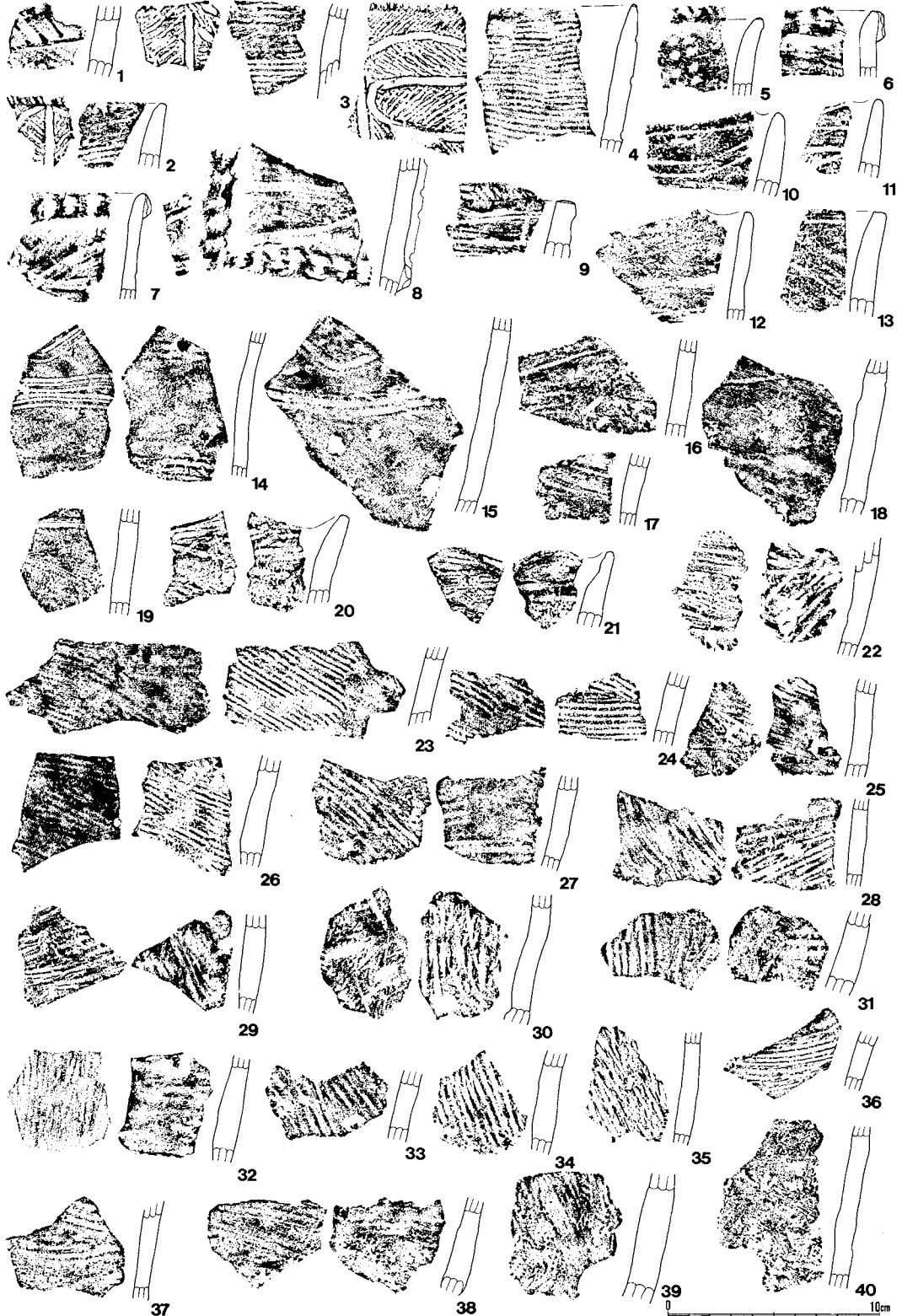
9～19は沈線文が施された土器。9は口唇上に刻みが加えられる。10～12は波状口縁の土器で、波状に沈線が施される。13は口唇下に1条の沈線が巡る。14は多条の沈線が波状に施される。内面には部分的に条痕文を残す。15～17・19は擦痕状の沈線が波状に施される。10・12・15～19には胎土中に動物珪酸体といわれる白色針状物質が含まれる。以上の6～19の土器は下吉井式土器と考えられる。

20～40は条痕文が施された土器。20・21は波状口縁の土器である。38・40は器面に擦痕状の痕跡を残し、胎土中には動物珪酸体を含む。

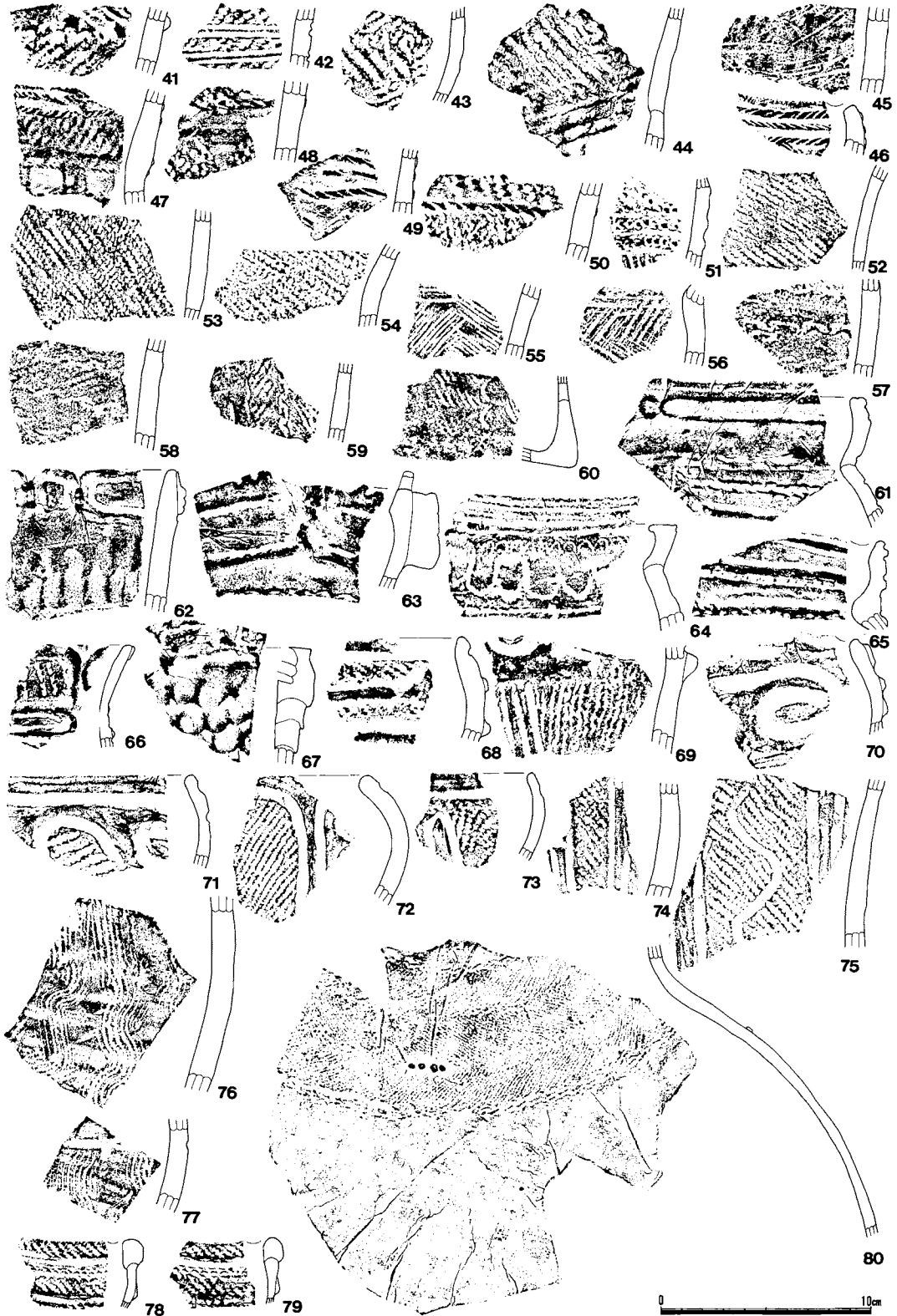
以上の土器は、多少の差はあるが胎土中に繊維を含む。

第2類（第15図41～44） 縄文時代前期前半の土器である。

41は平行沈線により文様が描かれ、瘤状貼付文が付けられる。42は単節の斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線が施される。43は環付きの単節縄文が、44は無節の縄文が羽状に施される。これらの土器は胎土中に多量の繊維を含む。関山式土器であろう。



第14図 包含層出土の遺物1 (1/3)



第15図 包含層出土の遺物 2 (1/3)

第3類 (第15図45~54) 縄文時代前期後半の土器である。

45は平行沈線で文様が描かれる土器で諸磯b式土器と考えられる。

46~50は浮線文が貼付された土器で、浮線上にはヘラ状施文具による刻みが加えられる。46は口縁が波状を呈する。47~50は縄文を地文とする。諸磯b式土器である。

51は浮線状に半截竹管による刺突が加えられたもので諸磯b式土器であろう。

52~54は斜縄文が施された土器。54は附加条の縄文か。

第4類 (第15図55~67) 縄文時代中期前半の土器である。

55・56は横位の平行沈線により区画し、平行集合沈線文が羽状に施される。57~60は結節のある縄文が施された土器で、57・58は横位、59・60は縦位に施文される。五領ヶ台式土器と思われる。

61は頸部が屈曲し、口縁部が内湾する土器。口唇上には結節沈線文が巡る。口縁部の文様は隆帯による幅狭の長楕円形区画文と区画文間の渦巻状の貼付文からなり、区画内は隆帯に沿って結節沈線文が施される。頸部の屈曲部には2条の結節沈線文が巡る。胴部上半の文様は結節沈線文による長方形の区画が形成され、区画内には蛇行する沈線文が充填される。62は口縁部に隆帯による楕円形の区画文が形成され、区画内は隆帯に沿って角押文が施される。区画文の端部には刻みのある縦位の貼付文が付けられ、そこから隣りあう区画文を隆帯が連結する。この隆帯及び区画外の隆帯に沿って角押文が施される。胴部は指頭状の押捺が巡る。63はキャリパー状を呈すると思われる土器である。刻みのある縦位の貼付文を貼付し、それを境にして隆帯による区画文が形成される。区画内は隆帯に沿って角押文が施される。口唇上は口縁部の貼付文を境にして刻みが加えられ突起状を呈する。64は頸部が屈曲し、口縁部が内湾する土器である。口唇部は平坦で、内外面端部には刻みが加えられる。口唇上には3条の結節沈線文が巡る。口縁部の文様は結節沈線文によって上下を区画された中に、上部には小ぶりの連続する逆「U」字状文が、下部には大ぶりの連続する「U」字状文が沈線により施される。65は波状口縁の土器で、頸部は屈曲し、口縁部は肥厚する。口縁部の文様は横走る隆帯に沿って角押文が施される。66は口縁部が外湾する土器である。口縁部には隆帯による幅広の区画文が形成され、隆帯に沿って角押文が施される。区画内には縦位の角押文列が充填される。頸部には隆帯による幅狭の長楕円形の区画文が形成され、隆帯に沿って角押文が施される。67は口唇部が内屈すると思われる土器で、平坦な口唇上には2条の角押文が巡る。器面には指頭状の押捺が多段に巡る。以上の土器は勝坂式土器成立期前後のものと考えられ、阿玉台式土器の影響をもつものが含まれる。

第5類 (第15図68~77) 縄文時代中期後半の土器である。

68は口縁部破片で隆帯による区画文をもつ。区画内は単節の斜縄文を地文とし、隆帯が貼付される。69は口縁部には渦巻文が、胴部は撚糸文を地文とし、3本1単位の沈線の懸垂文が施される。加曽利EⅠ式土器であろう。

70・71はキャリパー形を呈する土器で、70は波状口縁となる。太沈線による渦巻文や区画文が施され、区画内は縄文が充填される。加曽利EⅡ式土器である。

72・73は内湾する口縁部破片。沈線による逆「U」字状文が施される。加曽利EⅢ式土器であろうか。

74～77は胴部破片。74は複節、75は単節の斜縄文を地文とし、懸垂文が施される。76・77は蛇行する条線が施される。加曾利EⅡないし加曾利EⅢ式土器と考えられる。

第6類（第15図78・79） 縄文時代後期後半の土器である。

同一個体と思われる土器で、口縁部は波状を呈し、口唇部は肥厚する。隆起縄文帯間の無文部には三角形の刺突文列が2条巡る。安行Ⅰ式土器であろう。

第7類（第15図80） 弥生時代後期の土器である。

球胴状を呈すると思われる壺形土器。肩部には3段の縄文帯が羽状に施され、「S」字状結節文で区画される。剝落している部分もあるが、5個1単位の小形の円形浮文が貼付される。縄文帯以外はハケ整形後でいねいにヘラ磨きされ、赤彩される。弥生町式土器であろう。

Ⅲ．ま と め

城山遺跡は過去、市教育委員会・市史編さん室・市遺跡調査会により4地点の発掘調査が行われており、縄文時代前期、古墳時代前・後期、平安時代の集落址であるとともに、中世城館址と考えられる『柏の城』の所在する複合遺跡であることが知られている。特に市遺跡調査会で昭和60年度に実施した調査では、古墳時代後期を中心とする60軒に及ぶ住居址を始め、歴史時代の土坑・溝址・井戸址などが検出され、現在、発掘調査報告書の作成が行われているところである。

さて、今回の発掘調査は300㎡に満たない小規模なものであったが、本遺跡の内容について新たな知見を加えることができた。

縄文時代については遺構の検出こそなかったが、早期後半条痕文系土器の良好な資料を得ることができた。特にその終末、下吉井式土器の出土が多い。

住居址は4軒調査されたが、63号住居址は弥生時代のものである可能性がある。包含層中の遺物の中に壺形土器の大形破片があり弥生町式土器と考えられ、本遺跡では初見のようである。

61・62・64号住居址は、古墳時代後期鬼高式期のものであった。量的に多かった61・64号住居址の土器のうち、坏形土器・甕形土器・甗形土器について概観してみる。

61号住居址

坏形土器一口径13cm前後のもの10cm前後のもの2種があるが、器形的には稜をもち口縁部が外湾するという点では類似する。

甕形土器一長甕は胴部が比較的丸みをおびるもので、口縁部と胴部の径の差はそれほど顕著ではない。他に復元できなかったが、丸甕の破片が多くあった。

甗形土器一底部から比較的直線的に開く器形で、口縁部は強く屈曲するものである。

64号住居址

坏形土器一口縁部が短く外湾ぎみで内面に1条の沈線をもち全体的に偏平なもの、口縁部が長く直線的に開く大形のもの、口縁部が外湾するもの、口縁部が直立ぎみでやや小形のものバラエティに富む。

甕形土器一長甕はほとんど胴が張らず直線的で、口縁部は大きく開く点に特徴がある。丸甕は胴

部はほぼ球状を呈し、口縁部は外湾する。他に小形の甕形土器がある。

甕形土器一大形甕は胴部が僅かに内湾しながら徐々に開き、口縁部は大きく外反するものであった。

以上、2軒の住居址出土の土器についてみてみたが、共に6世紀後半代の年代を与えて大過ないものと思われる。しかしながら細かい部分では相違がみられ、64号住居址の土器の方が後出するものと考えられる。

歴史時代の遺構と考えられるものには土坑と溝址があった。特に土坑は群在しており、いくつかの類型に分類できそうである。長方形を呈した規格的なもの、焼土・灰などを覆土に含む不整形なもの、地下式竈などに分けられようか。いずれも出土遺物が僅かで、時期など特定できないが、長勝院という寺院自体、天正の末には創建されていた可能性があるという。そうだとすると、これらの土坑や溝址の構築は、長勝院創建以前にさかのぼることになる。『柏の城』に関連する遺構として考えてよいのかもしれない。今後の課題である。

最後になるが、前述したように今回の調査には、小・中学生にも積極的に参加してもらう調査体制をとった。児童・生徒の加わった発掘調査は間々みられる。その中には、調査に関係する者すべてが共に考え、試行錯誤をくり返し、実際に発掘調査に係わりながら、生きた歴史を学んでいくという姿勢をとり、これをなしとげている所もあると聞く。そのような意味からすると、体験学習を一つの目的とした今回の調査には、いくつか不備な点がみられた。報告書作成の時間と紙幅の都合もあり、今ここで詳細な検討はできない。しかし、このような試みは一過性のものとして終わるのではなく、何度もの積み重ねが必要なのはいままでもない。そのためにも今回の体験学習の部分に対する評価も正確に行っていかなばならない。生きた歴史を学ぶことにより、私達が未来に何を残す必要があるのかを知ることができるだろう。発掘調査という一つの場において、共に学ぶことにより、そのことを考えていくことは不可能なことではないと思われる。

巻末に調査に参加した子ども達の作文を掲載した。そこには、真夏の酷暑の中での彼らの頑張りがあますところなく表わされている。そして、新しい体験に対する驚きやとまどい、喜びや楽しさといったようなものが、私達に伝わってくる。子ども達がこのような感動を得ることができたという事だけでも今回の試みは成功したと考えるのは、関係者の思い上がりであろうか。すべてはこれからなのである。

【参考文献】

- 荒井幹夫他 1983『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会
- 今村啓爾 1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究 3』雄山閣
- 神奈川考古同人会 1984『シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題』
- 柿沼幹夫・小久保徹 1979『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
- 志木市教育委員会 1985『志木市の社寺』志木市の文化財第10集
- 志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』
- 谷井 彪・宮崎朝雄他 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦 1982「古墳時代集落構成の一考察—児玉地方の5～8世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として—」『土曜考古第5号』
- 横川好富・井上 肇他 1979『日本住宅公団高坂丘陵地区 埋蔵文化財調査報告Ⅱ』埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集 埼玉県教育委員会

調査に参加して

発掘作業をして

志木小学校 大林 邦生

ぼくは、土器がどこから出てくるか、どのように出てくるのか、まったくわからなかった。それに土器を探してくっつけば発掘は終わりだと思っていた。しかし、この夏休みで苦勞がよくわかった。

ぼくは始め、てきとうにほったらいやと思ったけれど、すぐにおこられた。一人でちがう所をほるのではなく、みんなで同じ深さに少しずつほっていくので、ぼくはびっくりした。しばらくすると足と首がいたくなつたし、たいくつしてきた。もうぼくはやけくそだった。だが、発掘というのは、一人でやるのではなく、みんなで力を合わせてやるものだということがわかった。

思い出に残る体験学習

志木小学校 吉田 和弘

「キンコーン、カーンコーン」チャイムが鳴り、席に座った。机の上に手紙が置いてある。見てみると、夏休みに体験学習を開くと書いてある。そのとき、「おもしろそうだな」というのが第一印象だった。ぼくは、社会は好きだけど、こういう行事には一度もいったことがなかった。でも、「小学校生活最後の夏休み。夏休みの思い出としていつてみるか」という気持ちが、いく動機になった。

いよいよ体験学習の日、この日はあいにく雨だった。ぼくの気持ちとは、正反対の天気だ。でも、ねんのためいつてみた。まず、土器のかけらを洗う作業だ。土器をさわるのは始めてで、いま手に持っている物は、昔の人

もさわって使っていたのかと思うと、なんだかびっくりしたような気がした。

「次の日こそ晴れて、発掘したいな」という願いがかなったように、天気はよく晴れていた。発掘する前は、なんとも言えない気持ちだったが、だんだん疲れたという気持ちに変わりつつあった。ぼくが始めて掘った土器は縄文式土器だ。黒っぽくもろい土器だ。それからどんどん掘って、だんだん床がみえてきた。掘るのも楽じゃないなど何回も思った。

そして、いちおう発掘は終わった。土器がさわれたことがうれしかった。次は復元作業だ。自分で掘った土器を完成させるのだから自分の物だと思って、しんけんに完成させたいと思っていた。8月末まで復元作業をやるのを待っていた。

いよいよ復元作業の日。復元作業は発掘より大変ということは分かっていたが、こんなにも大変だとは知らなかった。今まで土器を復元した人は、よくできたなあと関心するばかりだった。「あっ、これか」と思うとちがう。「絶対これだ」と思ってもちがうというふうに、思いどおりにはいかない。でも、自分で掘ったものを完成しなくちゃ、気がおさまらないので、いっしょうけん命やってみた。ちょっとでも復元できたときの気持ちは、なんともいえないいい気分だ。そのいい気分をもっと味わいたかったなど思った。

夏休み体験学習が終わった。夏休みの中で今年最高の夏休みだった。とくにこの体験学習はいつてよかったと思う。やっぱり何事もやってみるといことが改めて知らされた。ぼくの一生の思い出として、とうとい体験学

習だった。本当に「思い出に残る体験学習」だった。

夏休み子ども体験学習に参加して

志木第三小学校 伊野部信弘

ぼくは、この夏休みに遺跡の発掘とその整理作業の学習に参加しました。期間はどちらも5日間ずつでしたが、とても楽しかったです。

発掘では、住居跡内をいくつかに分け、ぼくが掘った所は、住居跡内のはじの方でした。土を掘ると中からいろいろな物が出てきます。土器のかけらが多いのですが、ぼくが掘った所に、ぜんぜんわれていないわんが出てきました。それに最後の日には、一つの場所から7つぐらいまとまって出てきた時には、ぼくはすごいなあと思いました。それから、ぼくが掘った所とちがう場所から、小さいほねらしい物も出てきました。

整理作業でぼくが作ったのは、大きなかめとおさらです。発掘で出た土器を水であらってかわかして、ジグソーパズルみたいにしてくっつけていくのです。全部きれいにくっつくわけではないので、むずかしかったけど、とても楽しい体験でした。

文化財発掘調査体験学習に参加して

志木第四小学校 町田理佐子

わたしは、夏休みに文化財発掘体験学習があるというので参加してみました。今までに志木市内に何千年も昔から人が住んでいる事など知りませんでしたので、参加して大昔の事をすこしでも知ろうと思いました。

発掘場所は、志木市柏町三丁目、長勝院というお寺です。このお寺の近くからは、古墳時代前期約1700年前と後期約1500年前の土器

や、住居あとなどもみつかったそうです。

わたしは、本などで見た事がありますが、土には層位があるということ、今回はっきりと分かりました。一番上が黒土、二番目がかっ色土、三番目が赤土だそうで、土の色が一つ一つちがっていました。土を掘っていくうちに、石のような土器を発見しました。土器にはいろいろな種類があります。カメ形土器やこしき形土器、たかつき形土器などたくさんあります。

参加している間に、住居あとや土器、古銭なども発掘されました。私も土器のはへんを何十枚もみつけだし、とってもうれしかったです。昔の人になんらかの形で使われていた物です。それを手にして、むねがドキドキしました。もっとみつけだせないだろうかと一生けんめい掘ってみました。まわりの「こんなみつけたよ」とかいう声にふりむいてみたり、とても夢がありました。真夏の暑い中、汗をかき、長ズボンをはき、帽子をかぶり、カにくわれながら掘りだした土器。そして、8月末になってから掘りだされた何千もの土器のかけらを一つ一つボンドでくっつける大変な仕事。でも、発掘学習に参加して、今までまったく知らなかった大昔の生活、地層の事、いろいろな事を少しでも見、また知る事ができ、大変楽しかったです。またこのような機会がもてる時には参加してみたいと思いました。

発掘調査について

志木第四小学校 山田 裕子

わたしは、最初の日に行ったとき、人がとても少なかったので、「休みの人もいるのかな」と思ったら、ちがいました。もともと少なかったのです。わたしは、もっとたくさん

の人が申し込んだのかと思いました。

掘るのは、たいへんでした。シャベルでうすく土をとるのですから。

でも、土器がでてくるのはおもしろかったです。最初は、先生方に、

「これ土器」

と聞いたりしました。土の固まりや石を土器とまちがえたりしました。でも、だんだんなれました。

さて、8月に入って発掘した土器をくつつける日になりました。

いってみたら、とてもたいへんでした。洗うとこしがいたくなります。最初の日、多いのをえらんだのがまちがいで、最後までかかってしまいました。

くつつけるのも、なかなか合うのがなくて、歩きまわってさがしました。

最後の日が近くなると、土器のかげらに文字を書いたり、もようがついている土器のたく本を取ったりしました。

又、友達もできました。宗岡第三小学校と宗岡第四小学校の人です。

友達もできたし、いろいろな事が身についたので、参加してよかったです。

発掘調査体験学習

宗岡第四小学校 鹿倉 由己

ぼくは、この体験学習が思い出になりました。こういうことは、めったにできないし、あまり子どもがやるなどないから、すごくうれしい。

また、目の前で土器を見たりするのは、はじめてでした。

一番始めに土器がでてきたときは、うれしかった。土器とかを掘ったら、住居や住居の柱のあとがでてきました。

発掘で一番おもしろかったのは、土運びでした。すごく重たいけど、一輪車で遊んでいるみたいでおもしろい。ぼくは、途中からほとんど遊んでいました。それから毎日土運びをしていました。みんなまねをして土運びをします。土運びをしている人は半分ぐらいでした。休けいに入ると、みんなすぐにやめて休みます。それほどみんなつかれてるんだなと思いました。休けい時間の間、みんないろいろなことをしていました。ぼくたちは店にいて、アイスをかっけてたべていました。毎日暑い日ばかりで、あせがだらだらできて、ふくがあせとよごれできたなくなりました。発掘のときはぜんぶそうで、白のTシャツがまっくろで、なかなかおちませんでした。

発掘がおわるとつぎは、土器をくつつける仕事でした。土器はなかなかくつつかないのでたいへんでした。土器のほかに、湯のみやほか石がでてきました。土器のかたちはしているのに色はちがうし、すごくたいへんな仕事でした。でもすごくいい思い出になりました。来年発掘があったら、ぜったいにやりたいと思います。

発掘調査の楽しみ

宗岡第四小学校 田澤 人志

ぼくは、思いがけず発掘ができた。はじめて行った日は、雨がふったせいで土がどろどろになっていた。くつも土がくつついてあるきにくかった。さっそく準備にとりかかった。まず軍手ももらって、シャベルをもって準備が完了した。発掘にうつった。さすがにほりかたもちがって、土をうすくうすくほっていった。すごくつかれたが土をほって見た。となりの人は、もう何か土器をみつけていた。ぼくもいっしょうけんめいがんばった。そし

たら中からかたい物が出てきた。いっしょにやっていたおじさんに、

「これなあに」と聞いたら「土器だ」といつてくれた。ぼくは、いっしょに「やった」と思った。そしてもっとももっとほって見た。なんとなくとなりの人と競争しているようなかんじがして楽しかった。それにどンドン土器のかけらが出てきた。すごくあせがでてきた。

そしてやっと休みがきた。ひとまずやめて、軍手を手からはずしてみた。そうしたら手はまっ白だった。でもなぜか指と指のあいだには、ちやいろくよごれていた。しばらくして休けい時間がおわった。とってもいい気持ちだった。そしてしばらくほっていると、おじさんが「これほってごらん」といった。ぼくはほって見た。するとその土器にはもようがついていた。それをもっておにいさんにきいてみた。「これいつごろの」ときいてみた。そしたら、

「これは何千年も昔の物みたいだ」といった。ぼくはなんとなく信じられなかった。そしてこんどは一カ所をずっとほっていった。するとだんだん土の色が赤っぽくなってきて、とてもかたかった。ちかくにいたおじさんが、「そこはほらなくてもいい」といったのでやめた。ほかのところについてもやっぱり土が赤くなってかたくなってきた。やっぱりはじめてだったので、つかれたけどとっても楽しかった。もう一度やってみたいと思った。

発掘調査体験学習に参加して

宗岡第四小学校 深沢 聡一

「やった、ぼくもみつけたぞ」と心の中でさげびました。丸っこくて、こげ茶色をしている物を見つけました。先生に見てもらったら、石だと言われました。石とまちがえやす

いと言われたけど、こんなに似ているとは思いませんでした。それからすぐに、こんどは本物の土器を見つけました。となりでやっていた中学生の人は、もう2、3個はみつけて、そうとう掘り進んでいました。ぼくも、追いつこうと、スピードをあげました。縄文土器や石器などもみつけてみたいなあと思っていました。

ほかのところでは、沢山出ているけど、どうして出ないのかと思っていたら、土器が出てきました。太くて、石かなと思っていたら縄文土器でした。思わず、持って帰りたくなりました。そして少しやっていたら、向い合わせになっていた細田君が、床を出していると言っていました。床ってなんだろうと思いました。そうしたら、そこに家があって、その床だと分かりました。ずいぶん早いなあと思っていました。先生に床まであと何cmぐらいか測ってもらったら、50cmもありました。気が少し遠くなりました。けれども、がんばってやりました。

あまり出ないので、あっちへ行ってもいいよと先生が言ってくれたので、細田君と行ってみました。そしたら、おもしろいほど、どんどん、どんどん出てきました。

次にピットというところを掘ったり、いろいろなところを掘ったりして、とっても楽しかったと思いました。

復元作業のとき、一番不思議に思ったのはこれだけの中から、どうやって元の形にもどすか、みんなほとんど不可能みたいなのを組み合わせていたから、すごいと思いました。先生なんか、土器を見て、どれにはまるかすぐ分かってしまいました。それから、ほとんど今のせともと同じなのに、昔のせとのだから、ぜんぜんみわけがつかないのも不思議

議でした。土器を洗うときが一番たのしいと思いました。

発掘と復元両方楽しかったけれど、ぼくとしては、発掘の方が楽しいと思いました。発掘調査体験学習で、とてもいい体験になりました。

発掘調査体験学習

宗岡第四小学校 細田 哲雄

ぼくは、発掘調査で、小学校生活最後の夏休みの思い出になりました。

発掘調査の1日目は、雨で1日延期になった。そのときぼくは、「どんねんだなあ」と思いました。

次の日は晴れていたのでできると思い、友達の鹿倉君の家に電話をかけました。すると鹿倉君は弁当を買うので、ぼくも早く行っていっしょに行くことになりました。その弁当屋では、作る時間が長くて、そのとき、

「あと10分しかないよ」と、ぼくは鹿倉君にいいました。弁当ができていそいでいきました。その弁当屋から、ものの5分もしないう

ちにつきました。

開会式のあとに、はんに分かれて住居跡と思える場所を掘りはじめました。しばらくして、石みたいな物に当たった。それを、スコップで掘り当ててみると、ただの石ころだった。発掘最初の当たりは石ころだった。

またそれからしばらくして、こんどはさっきとちがうにぶい音がした。また掘り当てると、石みたいな土器みたいな物でした。

「おばさん、これ土器ですか」と係のおばさんに言うと、

「それは土器」と言われて、ぼくはうれしくなりました。発掘で最初の土器が出たからだ。そして午前中は、あと5・6コあった。

午後の部の中場で場所がかわった。そこではなんと、土器がいっぱい出てきました。それも始めて30分もしないうちに。そして、午後3時になりこれでもう解散しました。これで1日目はおわりました。

できたらまた来年も、参加したいと思いました。

図

版



体験学習開校式



調査風景



61号住居址



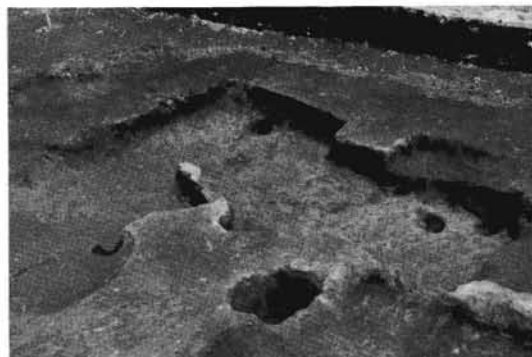
62号住居址



64号住居址



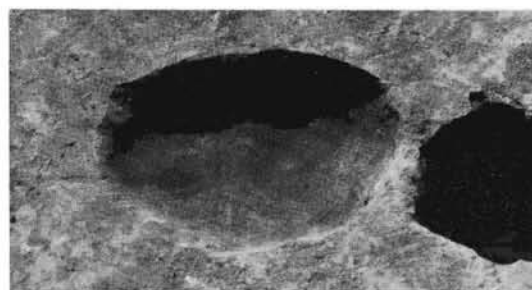
64号住居址カマド



33~35・47・48号土坑



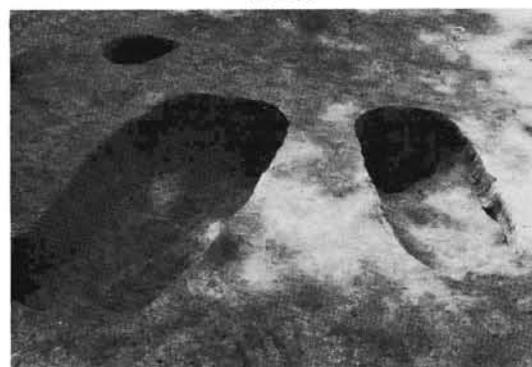
36号土坑



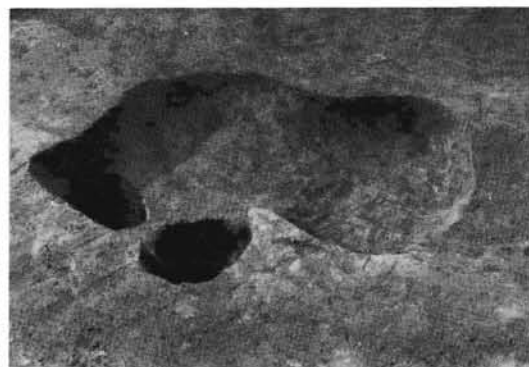
40号土坑



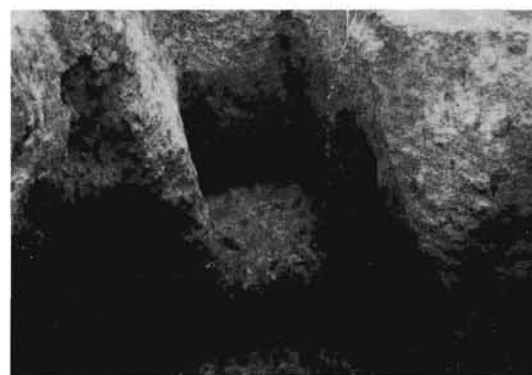
41・44号土坑



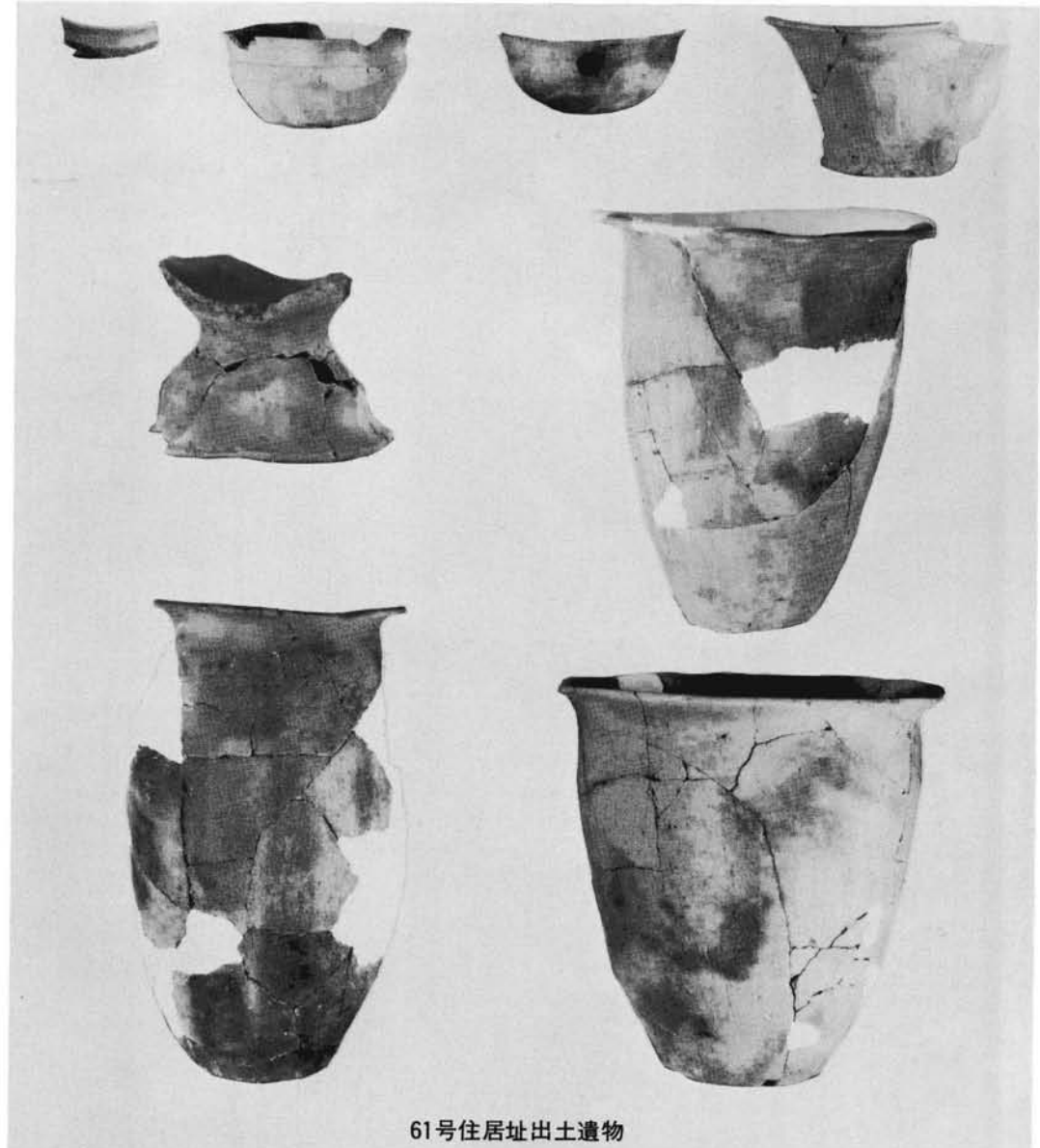
42・43号土坑



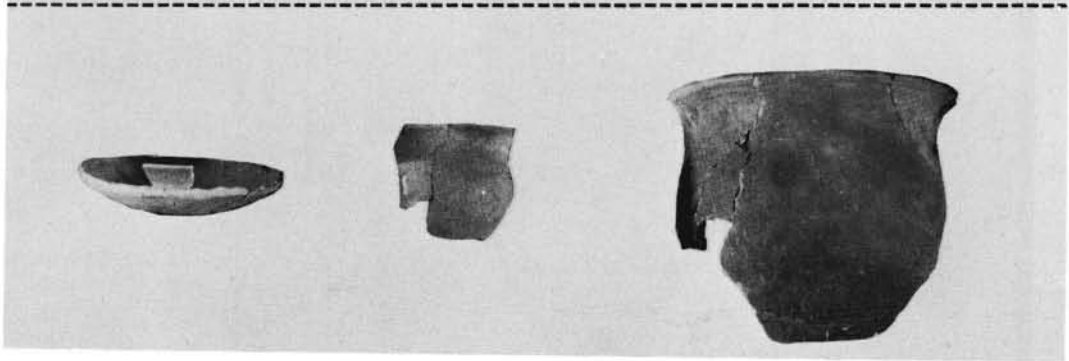
45号土坑



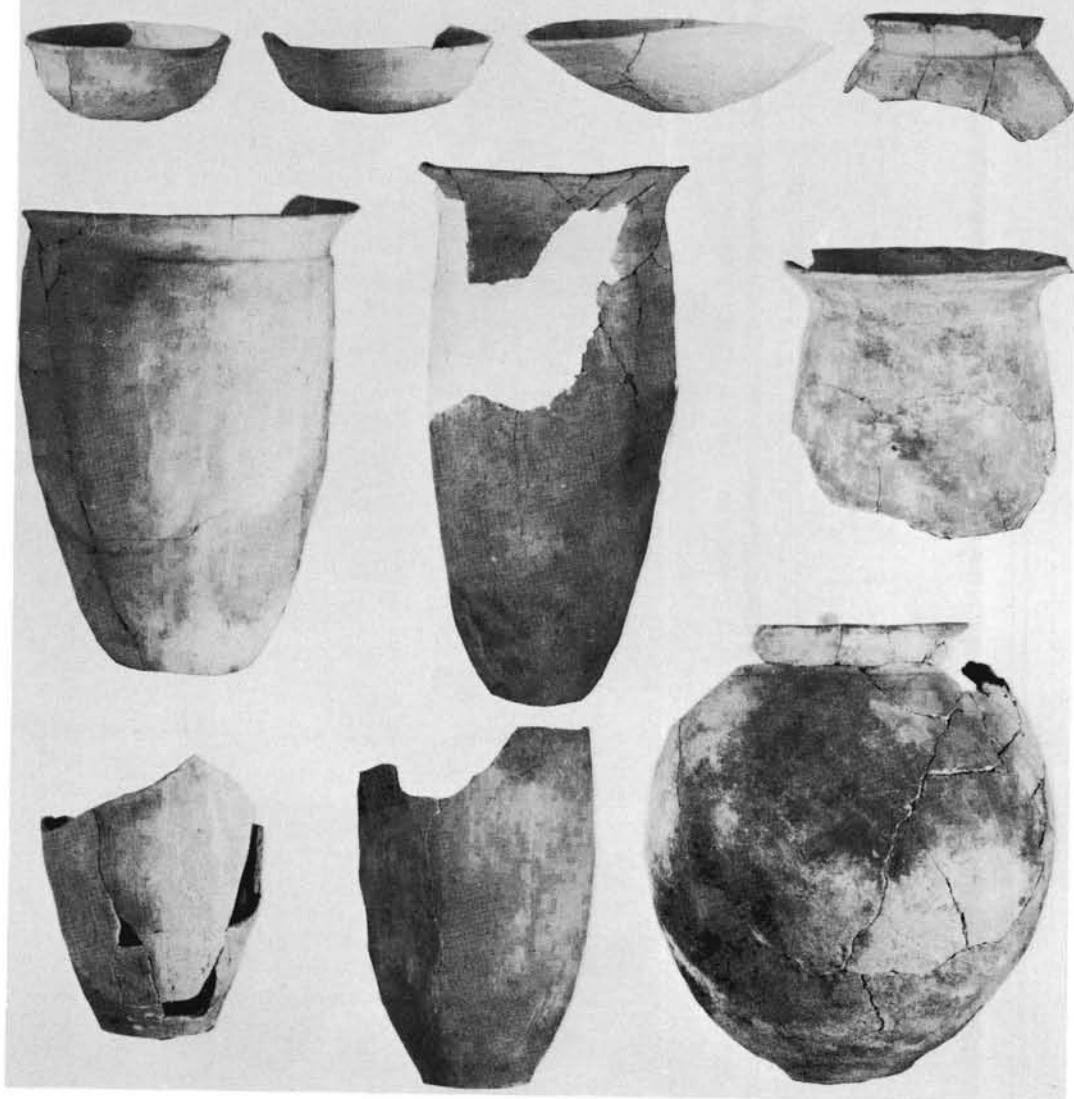
46号土坑



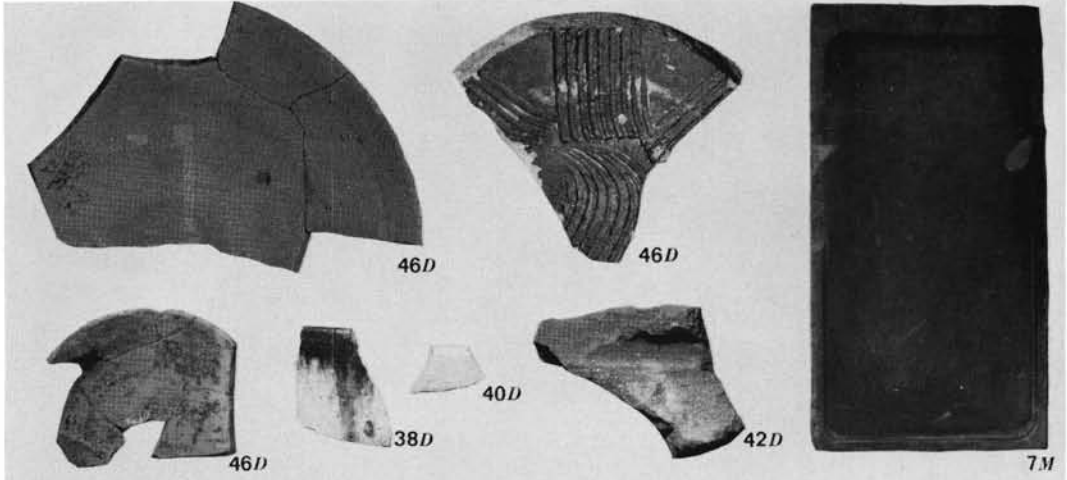
61号住居址出土遺物



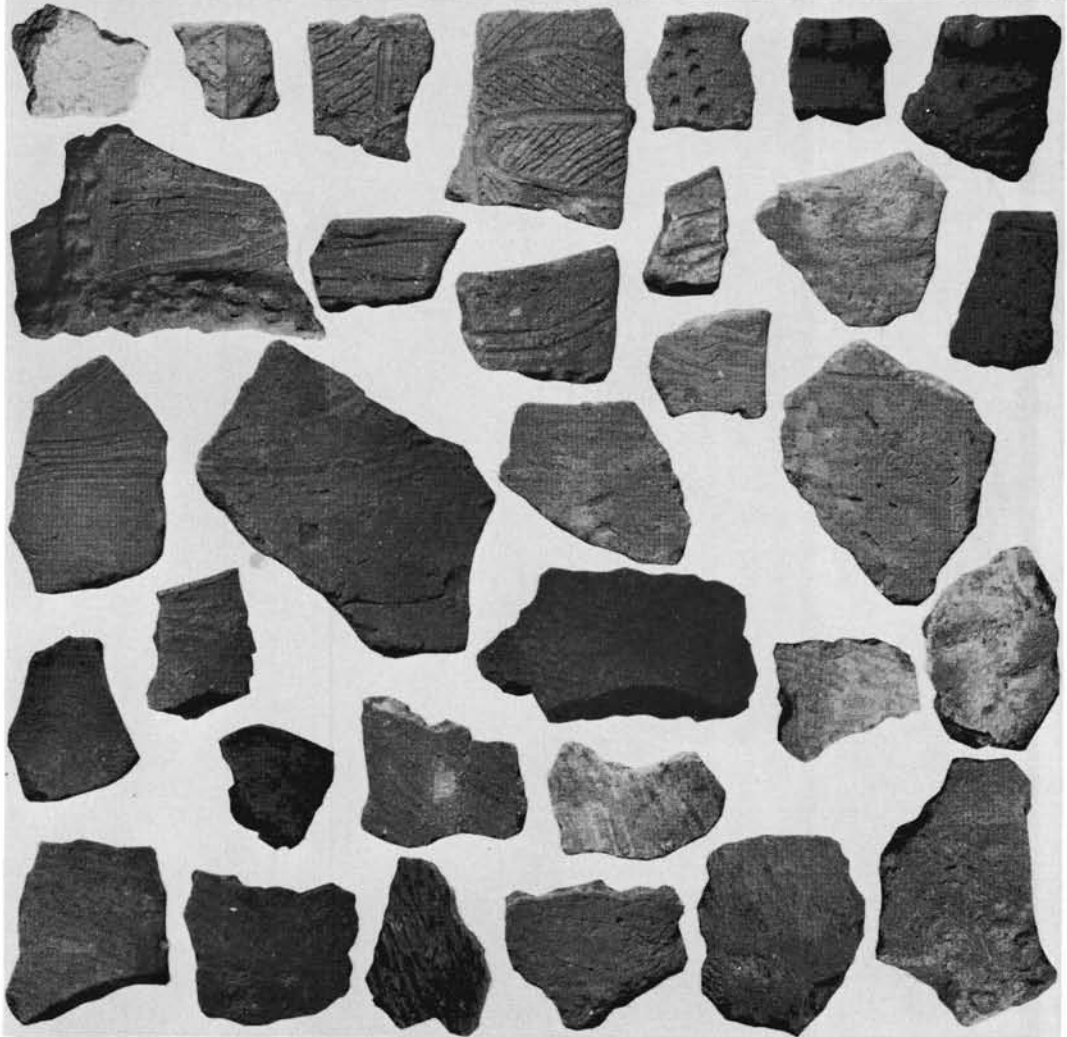
62号住居址出土遺物



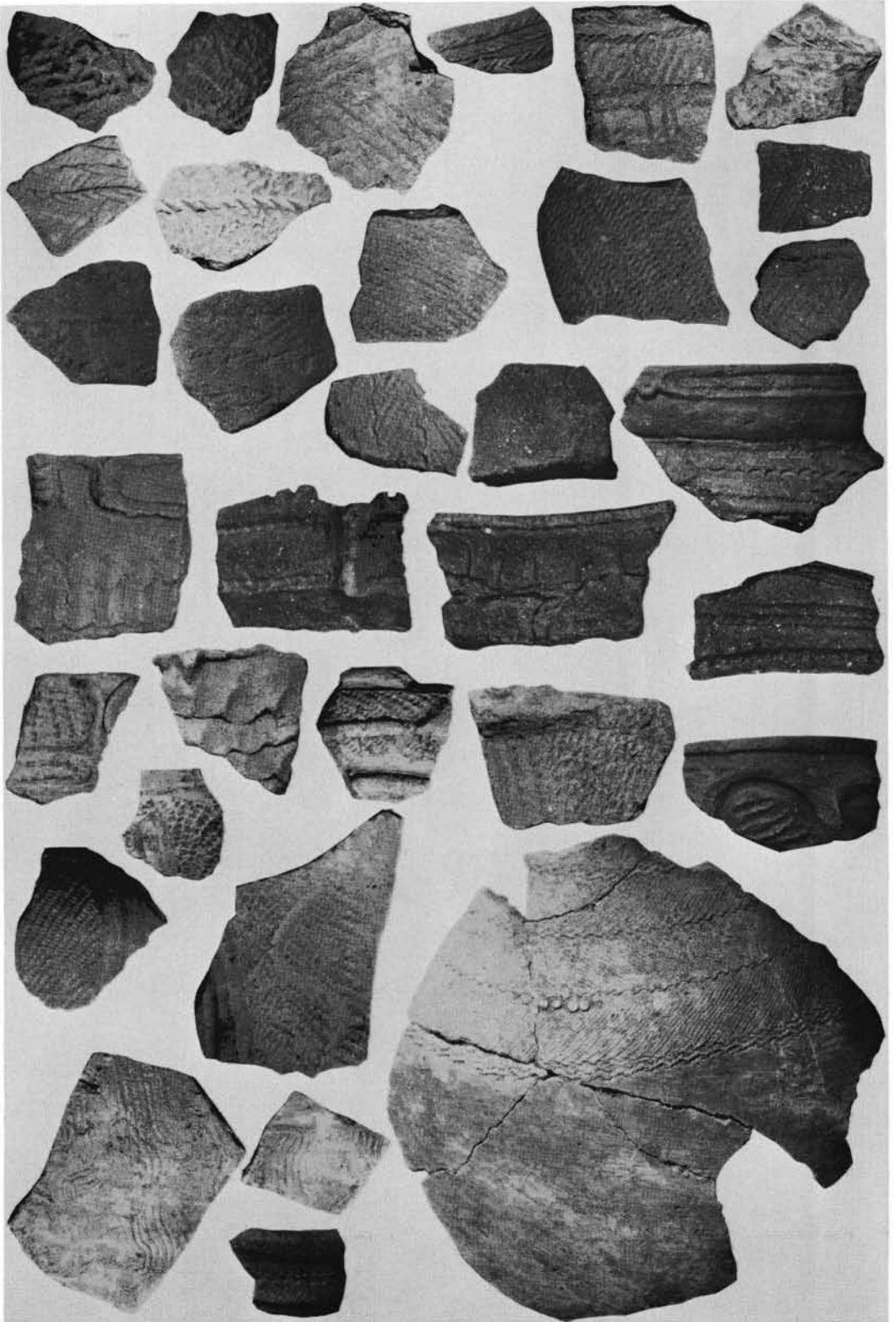
64号住居址出土遺物



土坑・溝址出土遺物



包含層出土の遺物



包含層出土の遺物

志木市の文化財第11集

城山遺跡長勝院地点

発掘調査報告書

発行 志木市教育委員会
志木市遺跡調査会
志木ロータリークラブ

発行日 昭和62年1月17日

印刷 梅田印刷株式会社

